

# 異種百人一首十種

——主として秀歌を輯めたもの——

伊藤嘉夫

万葉集二十に、天平勝宝七歳乙未二月、相替りて筑紫に遣さえし諸国の防人等の歌として、畏きや命被ふり明日ゆりや草が共寝む妹無しにして

右の一首は、国造丁長下郡物部秋持と共に七首を載せ、左註に

二月六日、防人部領使遠江国史生坂本朝臣人上が進れる歌の数十八首。但拙劣なる歌十一首あるは之を取載せず。

同様に、三首の歌を載せて、左注

二月七日、相摸国防人部領使守從五位下藤原朝臣宿奈麻呂が進れる歌の数八首。但、拙劣なる歌五首は之を取載せず。

ついで十首を採って、

二月七日、駿河国院人部領使守從五位下布勢朝臣人主、実進れるは九日、歌の数二十一首、但拙劣なる歌は之を取載せず。

というように、以下十九首中十三首、十七首から十首、十八首から十一首、二十二首から十一首、十二首から三首、十二首中四首、二十首中十一首、など、防人から集めて進つた歌は、(家持の歌が日次を追って、進達した日付の中

にはさまれていることなどから考えて)家持によつて撰ばれたもので、除いた歌を「拙劣なる歌」という語を使っているのは、うら返していえば秀れたもののみを採ったというのである。

これは最も早い選歌意識、文芸批評精神のあらわれであるといわれるが、撰歌意識は、作品結集のためには当然行われるものである。然し、ただ秀歌を撰ぶというだけでなく、その場における歌という意識も当然働く。

今日よりは顧みなくて大君の醜の御楯と出で立つ吾は

天地の神を祈りて幸矢貫き筑紫の島をさし  
て行く吾は

などという歌を、抄いている。然し、同じ一連の中に

ふたほがみ悪しけ人なりあたゆまひ我がする時に防人にせず

のような、云わば造反的な歌も採っているところに家持の歌に対する考えも見える。

撰集のために歌を撰ぶには、本来は秀歌を撰ぶ態度は必然的にあるとは云ったが、撰集はそれぞれ目的があり、秀歌撰集の唯一では勿論な

い。証歌、名所、地域、時代、女流、武家、法楽、等々の限定を持つものも多い。

百人一首の母体ともいべき百首歌も、重之の奉納のため、和泉式部のはその目的はわからないが、共に自歌を撰集したものである。後世には、鷹百首のように特定の限定を設けて撰んだことは、様式の上の一つの型が創られたことになり、この様式によつた百人一首が続々と出現するようになったが、これは、本来は小倉百人一首の跡をふむもので、百人秀歌の撰集であった。室町時代に最初に撰ばれたものが二条良基撰の後撰百人一首であるとされているが、これは偽撰である。中島悦次氏は、『百人一首の模倣者の最初に現れたものは、二条良基の「後撰百人一首」とされるが、元亨の乱中小倉山荘に籠り定家に倣つて選び、はじめ「続百人一首」と云つたとされる。この書の出現は江戸末で、序に「寛政申の来霜月中の二日(一八〇〇・一・一・一二)正三位貞直しるす」といい、「……こは良基おとどの御撰とかや言ひ伝へて、うみをなす春日の宮司の家に秘め置きし書とぞ……」

他の端書に、「……此本は彼御家の大夫のもとより長門の国、阿武乃春日の宮司波多野某が家に伝へたりしを写し得て梓にいちりはむことはなりぬ……」などをあげて

実に二条良基が元中二年（一三八八）六月十三日に六十九歳で歿した時から数えても四百十余年後の寛政十三年（一八〇〇）に突如として世に現われた経路にも腑に落ち

ないものがあるばかりでなく、小倉百人一首に洩れた歌人で、もし更に当然入れられそうに考えられる作家（源順、修理大夫頭季、登連法師、宮内卿、宗尊親王、等々）が、「新百人一首」に入っているのにこの「後撰百人一首」に洩れて居り、その作家の出た年代から見ても、新百人一首に、文武天皇、聖武天皇、大職冠から花園院に終るが、「後撰百人一首」は、村上天皇惟喬親王から頼阿、近衛関白左大臣に終り、年代も新しく、作家も選択も妥当でないものが多い。……だから後撰百人一首は新百人一首より後れて、しかも新百人一首を知っている人によって撰ばれたことが肯かれる。

と、良基の撰でないことを述べられている。そして「新百人一首」こそ、百人一首の類書、異種百人一首の最初のものとしてされている。新百人一首は跡見学園国語科紀要（昭四七・三）に紹介したので、ここには、偽書といわれるけれども、1後撰百人一首（伝二条良基撰）、をはじ

め、2新百人一首（水戸義公撰。足利義尚撰の同名の書とは別本）、3秀雅百人一首（緑亭川柳撰）4古今集百人一首（大森盛頭輯）、5現存百人一首（鋤柄助之撰）6古今百人一首（松平慶永撰）7宮城百人一首（日野資始撰）8大全明治新百人一首（小笠原美治撰）9新撰百人一首（西村茂樹）10歴代秀吟百首（川田順撰）の十種を鰾刻する。

これらはいづれも秀歌を撰出ししようとしたものである。本文だけからは後撰百人一首と新百人一首とはその前後を云い難いが、撰歌の質の上からいうと、新百人一首の方が秀れているようである。後撰百人一首は古今以後中世を主とし、新百人一首は、文武、聖武、鎌足、宇合、池主、旅人など上代の作者を加えて中古中世に及んで秀歌を撰んだ。室町時代の異種百人一首に、武家百人一首、武備百人一首があるが、武家という限定があり成立も異うので省略した。

徳川光圀は、好学の水戸義公で、近世の堂上、地下から撰んだ。ほとんど恋の歌がない。秀雅百人一首は、読み本の性格をもつ本で、作者をひろくとった。ほとんど近世の人。古今集百人一首、現存百人一首はその名の通り、古今百人一首は中世以後近世末まで、歌は精撰されている。古今百人一首は古今集とは関係ない。この本は、竹柏園にあったものの鰾刻である。かつて十三種百人一首の中に加えて活版になったことがある。撰者松永慶永は春嶽公で、好学の大名である。宮城百人一首は、仙台藩の人々の歌

を撰じたもので、予撰の稿が残っており、精撰に努力したあとのあるもの、作者は伊達政宗はじめ当藩士から僧侶町人に及んでいる。大全明治新百人一首は、百科辞典的な編集で、全巻一五四丁中百人一首は五十二丁。近世に重きをおいて当代をふくんでいる。泰平を謳歌する歌が多い。新撰百人一首は小倉百人一首の歌に恋の歌が多く、子女教育の上のことをおもんばかりで、たとえば

ほのぼのとあかしの浦の朝霧に島がくれゆく  
舟をしぞ思ふ 柿本人麻呂

と歌をさしかえたり、作者と歌を入れかえたりして、教材として適当なものにしようとした。さしかえたものは概ね古来の名歌である。最後の歴代秀歌百首は、百人の秀歌を集め、文武天皇から野村望東尼に至る。自信をもって撰んでいる。いづれも撰者の自信にみちたものだけにその撰歌の力、文学批評眼がうかがえる。

秀歌を集めた撰集は、勅撰集をはじめ私撰集にも数多くあるが、無限定の数では自然その分量が多くなる。手ごろなものというにも一定数がない。これは私家集でも云えることである。数があまり少いと十分にその所期するところを發揮出来ないが、百首という、数の觀念で一つのみとまった概念の得られる数にした百首歌は、作者の作歌力量を他に示すことが出来る分量であったように、百人一首は撰者の歌に対する考え、觀賞眼を他に示すに足る分量のものである。

後撰百人一首

伝二条良基(三〇一八)撰

- 1 影みえて汀にたてる白菊はをられぬ波の花かとぞみる 村上天皇
- 2 白雲のたえずたな引く峯にだにすめば住みぬる世にこそありけれ 惟喬親王
- 3 沖つ風ふきしく浦の芦の葉の乱れてしたに濡る袖かな 常盤井入道前太政大臣
- 4 咲く花のおのが色にやうつらむ千種にかはる野辺のゆふ露 祝部成光
- 5 萩の葉に風の音せぬ秋もあらばなみだの外に月は見てまし 入道二品親王道助
- 6 心をも跡をもとめずあくがれてあはれうき身の友千鳥かな 法印公順
- 7 たかせさす六つ田のよどの柳原みどりも深くかすむ春かな 権中納言公経
- 8 鷺の山いかにすみける月なれば入りての後も世を照らすらむ 法橋頭昭
- 9 心だにかよはばなどか鳩鳥のあしまをわくる道もなからん 後光嚴院
- 10 いつはりと思ひもはてばいかげせん待つをたのみの夕ぐれ空 前大納言経長女
- 11 吹きおぼる木曾のみ坂の谷風にこず多も知らぬ花をみるかな 鴨長明
- 12 下もえに思ひ消えなむけぶりだに跡なき雲のはてぞ悲しき 皇太后宮大夫俊成女
- 13 唐衣袂ゆたかにつつむかなわが身にあまる君がめぐみを 後普光園院摂政太政大臣

異種百人一首十種

- 14 ももしきに移し植ゑてぞ色そはむはこやの山の千代のくれ竹 花園院
- 15 幾夜わが家路忘れて斧の柄の朽木のそまの月をみるらむ 法印浄弁
- 16 あさひ山まだかげくらき明ぼのに霧のしたゆく宇治のしば舟 権大納言資明
- 17 行く秋の手向の山のもみぢ葉はかたみばかりや散りのこらむ 禎子内親王家摂津
- 18 ざりざりすいたくな啼きそ秋の夜のながき思ひは我ぞまされる 藤原忠房
- 19 年経ぬるよどのつぎ橋夢にだに渡らぬ中と絶えやはてなむ 光明峯寺入道前摂政左大臣
- 20 ちはやぶるかもの社の神もさけ君わすれすばわれも忘れじ 馬内侍
- 21 久方の天照る月のかつら川秋のこよひの名に流れつつ 山階入道前左大臣
- 22 住吉の松のあらしもかすむなり遠里小野の春のあけぼの 覚延法師
- 23 とにかくにうきは此の世の習ひぞと思へば身をもうらみやはする 平親清女
- 24 たちばなの匂ひをさそふ夕風にしのぶむかしぞ遠ざかり行く 平維貞
- 25 いくたびもかきこそやらめ水茎の岡のかや原なびくばかりに 入道贈一品親王尊円
- 26 おのが音につらき別れのありとだに思ひも知らで鳥や鳴くらむ 藻辟門院少将
- 27 逢ふことは思ひ絶えぬる暁もわかれし鳥の音にぞなかるる 藤原重頼女
- 28 すみ吉の松もわが身も古りにけりあはれと思へ秋の夜の月 西園寺前太政大臣
- 29 なほざりに思ひしほどやつつみけむ恨みにあまる袖のなみだを 勝部師綱
- 30 立ち籠むる霧のまがきの夕月夜うつれば見ゆる露のした草 前参議為秀
- 31 沖つ風ふけひの浦に寄る波のよるともみえず秋の夜の月 小侍従
- 32 すみよしの浅沢小野のわすれ水たえだえならで逢ふよしもがな 藤原範綱
- 33 思ふには深き山路もなきものを心の外になにたづぬらん 平泰時朝臣
- 34 恋ひしのぶ昔の秋の月かげを苔の袂のなみだにぞ見る 法眼行濟
- 35 かねの昔は霞のそこに明けやらでかげほのかなる春の夜の月 前大納言為家
- 36 くれ竹の折れふす音のなかりせば夜ふかき雪をいかで知らまし 坂上明兼
- 37 手枕の野辺の草ばの霜がれに身はならはしの風の寒けさ 兼好法師
- 38 夕月夜潮みちくらし難波江のあしの若葉をこゆる白なみ 藤原秀能
- 39 くもりなき鏡の山の月を見て明らけき世をそらに知るかな 宮内卿永範
- 40 しら波のかけても人に契りきやこと浦にのみ海松布かれとは 衣笠左大臣
- 41 玉藻刈るかたやいづくぞ霞立つあさかの浦の春のあけぼの 前中納言為相
- 42 ほととぎすしのぶの乱れ限りありてなくや五月の衣手の森 津守国冬

43 つつみえぬ泪なりけり郭公声をしのぶの森の

した露 後照念院関白太政大臣

44 庵しめてすむとは人に見えずともこころのう

ちの山かげもがな 安嘉門院四条

45 しぐれかと聞けば木の葉の降るものをそれに

もぬるるわが袂かな 藤原資隆朝臣

46 池水にますみの鏡かげそへて塵もくもらぬ秋

の夜の月 冷泉前太政大臣

47 よとともに恋ひわたれども天の川あふせは雲

の余所にこそあれ 源 雅光

48 うつつには語るたよりもなかりけり心のうち

を夢に見せばや 前左兵衛督教定

49 来ぬまでも待つはたのみの有るものをうたて

あけゆく鶏の声かな 平 頼 泰

50 橋立や松吹きわたる海風に入海とほくすめる

月かけ 大江 茂重

51 たれとなきやどの夕べを契りにてかはるある

じをいく夜とふらむ 藤原 業清

52 解けそむるわが下紐はさきの世にたが結びけ

る契りなるらむ 藤原為明朝臣

53 はがへせぬ松のひまよりも月は君が千年の

かげにぞありける 源 忠季

54 うしとみし人よりもなほつれなきは忘らるる

身のいのちなりけり 源 兼泰

55 きぎす鳴く片野のみの花すすきかりそめに

来る人なまねきそ 藤原 時房

56 もろともにみしをかたみの月だにも朽ちなば

そでにかげや絶えなむ 前大納言良教

57 袖にさへ秋の夕べは知られけりきえしあさぢ

が露をかけつつ 女御徽子女王

58 くもりなきかけもかはらず昔みし真間の入江

の秋の夜の月 前右兵衛督為教

59 紅葉せぬときはの山は吹く風の音にや秋を聞

きわたるらむ 紀 淑 望

60 君はかく忘貝こそ拾ひけれうらなきものは我

がこころかな 二条院女蔵人左近

61 思ふこといはで心のうちにのみつもる月日を

しる人のなき 弁 内 侍

62 姫小松おほかる野辺に子日してこころに千代

をまかせつるかな 源 道濟

63 わかれ行く都のかたの恋しきにいざ結びみむ

忘れのる水 齊宮 甲斐

64 恨みても恋ひても経ぬる月日かな忍ぶばかり

をなぐさめにして 後山本前左大臣

65 風はやみとしまが崎を漕ぎゆけば夕浪千鳥た

ちる鳴くなり 神祇伯頭仲

66 やましろの水のの里に妹をおきていくたび淀

の舟よばふらむ 従三位頼政

67 松島やをしまが崎の夕がすみたな引きわたせ

あまのたくなは 前参議親隆

68 色かはるこころの秋の蔦かづら恨をかけて露

ぞこぼる 伏 見 院

69 秋の野の花わけ衣みやこまで色はやつさじ見

む人のため 二条院三河内侍

70 わすれては世をすてがほに思ふかなのがれず

とても数ならぬ身を 夢窓 国師

71 逢ひみしは昔がたりのうつつにてそのかねご

とを夢になせとや 土御門内大臣

72 紅のやしほの岡のもみぢ葉をいかにそめよと

猶しぐるらむ 藤原 伊 光

73 かよひ路のなきにつけてぞ忍ぶ山つらきこ

ろのおとはみえける 前大納言為定

74 くもるともよしや泪のます鏡わがおもかげは

見てもかひなし 高階 宗 顕

75 花の散ることやわびしき春霞たつたの山のう

ぐひすの声 藤原 後 隆

76 暮れてゆく年のすがたは見えねども身につも

りてぞあらはれにける 藤原実清朝臣

77 夏衣まだひとへなるうたたねに心してふけ秋

のはつ風 安法 法師

78 月かげのさすにまかせて行く舟はあかしの浦

やとまりなるらむ 藤原実光朝臣

79 わが恋はみ山がくれの草なれやしげさまされ

ど知る人のなき 小野 良材

80 物思ふみなかみよりや泪川袖に流るるものと

なりけむ 従二位業子

81 忘れじの言の葉いかになりにけむたのめしく

れは秋風ぞ吹く 宜秋門院丹後

82 衣うつ音を聞くにぞしられぬる里遠からぬ草

まくらとは 俊盛 法師

83 あはれにもめぐりあふ夜の月かげを思ひいれ

ずや人は見るらん 永陽門院少将

84 木のもとをすみかすればおのづから花見る

人になりぬべきかな 花 山 院

85 あら玉の年の終りになるごとに雪もわが身も

ふりまさりつつ 在原 元方

86 天の川秋の七日をながめつつ雲のよそにも思

ひけるかな 大蔵卿有家

87さみだれに淀の川岸水こえてあらぬあたり  
舟よばふらし 左近中将定親

88露をなどあだなるものと思ひけむ我が身も草  
におかぬばかりを 藤原 惟基

89秋風に声をほにあげてくる舟は天の戸わたる  
雁にぞありける 藤原菅根朝臣

90言の葉にそへても今はかへさばやわすらるる  
身に残るおもかけ 遊義門院権大納言

91春霞かすめるかたや津の国のほのみしま江の  
わたりなるらむ 源頼家朝臣

92よしさらば身を秋風に捨てはてて思ひもいれ  
じ夕ぐれの空 源家長朝臣

93君が植えし一むらすすき虫の音のしげき野べ  
ともなりにけるかな 三春 有輔

94月草の花ずり衣かへす夜はうつろふ人ぞ夢に  
見えける 前大僧正公朝

95君が代の千とせの松の深みどりさわがぬ水に  
かげは見えつつ 藤原 長能

96とへかしな尾花がもとの思ひ草しほるる野べ  
の露はいかにと 右衛門督通具

97むねは富士袖は清見が関なれやけぶりも浪も  
たたぬ日ぞなき 平 祐幸

98まき向の檜原の山の呼子鳥はなのよすがに聞  
く人ぞなき 土御門院

99数ならぬ三室の山の岩こすげいはねばしたに  
なほ乱れつつ 頼阿法師

100おのづから都にかよふ夢をさへまたおどろか  
す峯の松風 近衛関白左大臣

異種百人一首十種

○

〔解説〕文化竜集丁卯夏新鐫、大坂書舖柏原屋清右衛門・播磨屋喜助板行の木板本によった。この書、古くから疑われ、中島悦次氏、吉田幸一氏らの考証によって偽書説がほとんど定説となつてゐるが、にもかかわらず、文献として伝良基撰と扱つてここに挙げた。序に、

建武の乱れより君臣上下心々に九重を出でて都近きしるべの方へ退き給ひける中に、後普光院摂政殿下は嵯峨の中院に世の塵をさけおはしましける時、京極中納言の跡にやならはせ給ひけん、天曆の御門より其頃の君臣に至るまでを思し出るままに、時代のあとさきをもついでず、み心によしと思す儘を書い集め

おかせ給ひけるか、其後六首（あるひは八首とも）虫ばみ亡びけるを、後の中院関白顕実殿下補はせ給ひて、後撰百人一首と名づけ給ひけるとなん。此本は彼御家の太夫の許より長門阿武の春日の祠の宮司波多野某が家に伝へたりしを写し得て梓にちりばむることとはなりぬ

とあり、さし絵、順徳院建保六年八月十三日中殿御会の図あり、更に  
みけつ国名庭わたりに住人の、後撰百人一首といへるふみに、秋の田の鳴のはしがきたうべよとこへり、こは良基のおとどの御撰とかや言ひ伝へて、うみをなす長門の春日の宮司の家に秘置きし書とぞ、抑百っ人の歌を集めしは定家中納言の賢寂入道の求めに随ひて書

いつけおくられしを始として、後世にも是かれ集し人もあれど、彼おとどのみ撰びは石上古りにし頃より、いかがさきいかなる事にか聞伝へざりしか、今なん呉竹の世におほやけにもなりなば、誰も誰も玉くしげ底たからとて木綿花のめで榮えて、此たはかりをも、谷くぐのさ渡る極みまでよろこびに思ひつつ、言の葉の露のふる事を、軒の忍ぶのしのばざらめやも。寛政申のとし霜月の中の二日、おほきみつの位さた直しるす。

つづいて本文は出像（淵上旭江）と歌（筒井尚堂）を書き、上欄に歌意などをかけて読み物としての華麗さをそえている。

新百人一首と後撰百人一首と比較して、重複している作者は、二条院女藏人左近、馬内侍、源道濟、神祇伯頭仲、従三位頼政、鴨長明、藤原秀能、小侍従、宣秋門院丹後、入道二品親王道助、安嘉門院四条、常盤井入道前太政大臣などあり、中には

萩の葉に風の音せぬ秋もあらばなみだのほかに月は見てまし 入道二品親王道助

のように同歌の重なりもある。後撰百人一首は新百人一首を知った上で撰ばれたとするわけにはゆかないと思われる。然し、新百人一首が室町將軍によって撰ばれた文明十五年以後に撰ばれたという確証は見いだせないが、中島悦次氏の言われるように、出現の状態からしてあやしき百人一首である。然も六首乃至八首の虫蝕補入をいってその歌を挙げないのもあやしい。

新百人一首

水戸徳川光圀撰輯  
元祿年間(一六八七)

- 1 天津空曇りなきまで照る月のうつれる水の底  
もにごろじ 後 水尾院
- 2 春はただ花をあらしになしはててとはれぬう  
きも身には恨みじ 後花園院女臈
- 3 空よりや天の河原に吹く風の声をもおとす峯  
のたぎつせ 称名院入道前左大臣
- 4 身のはてよいかか鳴門に立つ浪のあはれしづ  
けき時のまもなし 逍遙院前内大臣
- 5 誘ふにはおほふ袖もやありなまし日数ぞ花の  
あらしなりける 三光院前内大臣
- 6 大ぞらに山の端もがなくれやらぬ春の日影の  
中やとにせん 中納言雅康
- 7 つれなくて露はさながら明日の夜の光におき  
し朝がほの花 前参議濟継
- 8 いかにしておもはぬ人をしのぶらむ忘れてふ  
名の草もあるかな 沢庵法師
- 9 春風に水のこほりもとけ初めてながれもひろ  
く浮ぶうろくづ 祖心 官女
- 10 法の水すめる心のたのしみやまづさきだちて  
夢に見ゆらん 板津不守一
- 11 散らばまた花にうつらん恨みまでかずある月  
に思ひ侘びぬる 権大納言政為
- 12 立ちならぶかひこそなけれ桜ばな松に千とせ  
の色はならはで 僧正 信玄
- 13 あはずはと思ひながらも片糸のたたむとまで  
は恨みざりしを 後柏原院
- 14 呉竹の万世までも契るかなあふぐにあかぬ君  
が行幸は 左大臣源秀忠
- 15 末とほみわけゆくかたの野辺にして子をおも  
ふ雉子音をこそは鳴け 良純親王
- 16 かぎりあるや秋の名残も今日までといはぬば  
かりにうつるしら菊 尾張大納言光茂
- 17 ともすればしらぬ夕べをなげくかな今日を忘  
るる心ならひに 松平伊予守綱政
- 18 世のほかのものところ見れ富士の嶺の雪はさ  
ながら空につづききて 榊原式部大輔政房
- 19 消えかへりをしむ心や暮れてゆく秋におくる  
霜とならまし 匂当内侍
- 20 明けぬ夜におもひをいかに暗部山やどりかる  
べき道は有りとも 邦高親王
- 21 朽ちぬとも猶折々は訪ふ人の心にかかる谷の  
かけはし 元政法師
- 22 年をへて祈るししかつれなさをうき身のと  
がと思ひしりきは 本多丹後守重世
- 23 梅が枝に春雨にほふ鶯の声にこぼるる花のし  
た露 由良信濃守頼繁
- 24 なごの海やうら山かけてながむればやまとに  
はあらぬ浪のからしま 加越能少将光高
- 25 限なき御代に契らむ八千年をときはかきはの  
庭のくれ竹 右大臣兼避
- 26 たれかさてかくとも知らで過ぎなましうき身  
離れぬ思ひのこして 良恕親王
- 27 春毎に緑をそむる池水に千年ふるべき青柳の  
陰 広橋大納言兼賢
- 28 雨夜にもさはらぬかげと見し月の日数にくも  
る夜の卯の花 松平对馬守照重
- 29 時にあへば芝生のすみれそれさへも朱をうば  
へる武蔵野の原 井上河内守守利
- 30 ためしにも書きつたふべき文月のはつかの夜  
半の初雁のこゑ 小出大和守吉英
- 31 初瀬山入相の鐘は響くとも尾上の霜にくれぞ  
のこれる 内藤左京亮義概
- 32 いさぎよくすめる仏の国民もなべて教のみち  
は広しな 中川佐渡守久恒
- 33 御稜せしきのふの瀬々の白浪に今朝は立ちそ  
ふ秋のはつ風 山名主殿頭矩堂
- 34 けふといへば見ぬさかひなる霞をもやどなが  
らしる春は来にけり 有馬 重広
- 35 山里は軒端つづきに峯の松今日立ばなの門に  
もてなす 小堀遠江守宗甫
- 36 東雲のいま一こゑの郭公よし山の端に月は入  
とも 諏訪周防守忠治
- 37 浦人の汐くむ袖も朽ちぬらん磯のとまやの五  
月雨の頃 御輝官女
- 38 つくづくとまもる灯かきつくし独雨さく寝や  
の夜ふかき 権大納言雅親
- 39 聞く人のこころごころにおどろかむ鳥はかは  
らぬあかつきの声 大森信濃守正安
- 40 春ながら軒端の松も白妙に霞もわかぬ今朝の  
あわ雪 小出備前守英安
- 41 鈴鹿山八十瀬に落ちて行く水のながれもはや  
し五月雨の頃 蜂須賀阿波守光雄
- 42 おもひあまりねられぬ夜半の雨の空哀を問ふ  
や軒の玉水 転法輪中納言公富

43 野をひろみ分け行く袖の濡れごろも夕暮ふか  
き夏草のかげ 権中納言藤原為賢  
44 いつをさてかぎりならまし日にそへて強面き  
うちにつもるおもひを 尊純法親王  
45 秋も月も今宵なりけり入がたの出でぬるほど  
の空をのこして 山名隼人光豊  
46 なかなかにつづらおりなる道たえて雪に隣の  
近き山ざと 伊達陸奥守政宗  
47 立わかれ我おもふこと筆にかき心にそめて行  
はしのうへ 化丁法師  
48 ほさでただ袖にまかせん涙川ながれて終にあ  
ふせありやと 田村右京亮宗永  
49 けふといへば嬉しきものかあげまきのむかし  
の春をおもひ出られて 吉川 惟足  
50 一とせの行くよりも猶今日の日のくるるや遠  
き星合の空 小出 英直  
51 今日もまた尋ねくらさむ山里に花に一夜のや  
どはなくとも 浅井備前守長政  
52 露の身をおくれさきだつ習ぞとしりても袖の  
かわきやはする 本田 正照  
53 浅ましのおやと昔見しかどもおもへば今の我  
身なりけり 毛利玄橋女  
54 いつのまに庭の萩原声たてて今朝ぞ身にしむ  
秋の初かぜ 細川行高母  
55 和歌浦や真砂にたてる芦たづのあと踏道にま  
どはするかな 烏丸大納言資慶  
56 おもふぞよ逢ひみて後のとばかりにははては神  
さへつらからん身を 源光通卿室女  
57 古郷の人のこころもはづかしや錦にはあらぬ

異種百人一首十種

墨染のそで 讚岐守頼重女  
58 おもひなき雲の上まで行ものは月みる夜半の  
こころなりけり 秋田安房守室女  
59 けふばかり空に雲路の関もがな花に吹きくる  
かぜやとくらん 保科肥後守室女  
60 かくあらん行方をしらで契りつる我が心をば  
誰にかこたむ 瀬川采女室女  
61 人ならばうき名やたたん小夜更けて我手枕に  
かよふ梅が香 伊達宗利室女  
62 おき別れ消えぬうき身を露ばかり袖にのこし  
て暮れをまたなん 小出英直室女  
63 独寝の思ひふかめて夜とともにやどるもつら  
き袖の月かげ 権中納言実住  
64 ひととただ強面きなかにつれなくて幾世をふ  
るの神杉もうし 中院大納言通茂  
65 いかにもせんつれなきほどもこりもせぬ身はあ  
やくになるものから 三葉軒室女  
66 問ふ人をまつ心さへうづもれて道たえにけり  
雪の山里 公海法師  
67 時しあれ涙たたへてほととぎすなくや五月の  
雨にまさりて 松平大膳大夫室女  
68 草木にはいつ吹出でん秋近く風のやどりは園  
のあふきを 後奈良院  
69 いかばかり子ならぬ我にそむかじとおやの諫  
は道ならなくに 正徹法師  
70 惜しむともかひもあらじに散る花を身にたと  
へてや人のみるらん 陽山法師  
71 うしや人なほ言の葉も残る夜の明かしもはて  
ずいそし心は 日野大納言弘資

72 花紅葉見しは昨日の春秋もむかしにふりぬ庭  
のはつ雪 戸田茂睡息輪女  
73 おくまに草のはつかに枯れなして我とすく  
なき霜の色かな 侍従中納言道勝  
74 身にそふは中なかつらし今はとておき出し床  
にのこるおもかげ 伯三位雅為王  
75 色そむる雁の涙もいかならん鶉なく野の秋の  
しら露 従三位資直  
76 雪はまたかきくらし降る年の中に道ある世と  
や春は来にけり 二条前関白太政大臣康通  
77 おきなさびあはれなべても釣る糸のよるさへ  
月に小舟こぐみゆ 後土御門院  
78 花にうらみ袖にまたれて程もなく身にしみか  
はる秋の初かぜ 斎藤摂津守三友  
79 御被せしけふは名ごしにいひなまし我恋せし  
のこころをやる 飛鳥井雅章  
80 逢ひみての後にも残る言の葉の暮まつ程にう  
きやつくさじ 藤原頼母室女  
81 松の葉の千世経る御代の初雪にあらはれ出て  
や君にそふらん 九条左大臣道房  
82 寝覚めしてうき世をひとりおもはずは夢にな  
されぬ老や嘆かむ 道賢法師  
83 あなたふとうき世の夢の覚めぬらんその暁を  
まつのあらしに 細川玄旨法師  
84 この時にあふぞうれしきおほけなくひじりの  
道も君がこころを 左近衛権少将藤原綱時  
85 行末もめぐりあはむと高野山その暁を月にこ  
そまて 賢俊法師  
86 あはれさを心にこめて忍ぶまに恋といふ事を

ひとにしらする 今西法師

87 これはその別れとかいふことならむ空に友なき春のかりがね 宗祇法師

88 よそにしていひもつくさじ身ひとつに積るうらみのはてしなれば 永井良徳室女

89 おもひきや朝ゆふなれしから衣袖は涙に朽ちんものとは 嶋津藤原忠興室女

90 いひよらば人めもよしや芦垣のまぢかきなかを忍ぶくるしみ 藤原常友室女

91 君が経む幾年なみの契りをかむすぶ御池の氷なるらん 近衛前摂政太政大臣

92 秋ならばあきのならひとゆふ暮をながめ捨てても袖の露けき 藤原一本息女

93 行幸する我大君は千世経へき千尋の竹をためしとぞ思ふ 関東右大臣源家光

94 色そひぬ月の光を白ぎぬにつつみて残る布引のたき 飛鳥井雅直

95 いつまでと霜がれをまつ浅茅生によわらぬ虫の音さへはかなし 夢想国師

96 せめてさは糸路の橋をかけ初しなかの契りの歎きともがな 入道前大政大臣信尹

97 散ることもいそがざらなむ山ざくら春におくる心ながさに 中院前内大臣道村

98 あくる夜はをじかの角のつかのまも夏野の露にやどす月影 鳥丸大納言光広

99 見し秋もみざりし色も霜の上に霜よりしろき冬の月影 後光明院

100 つひいかになり行く身とも白雲のはるる時なきおもひ悲しも 後西院

〔解説〕青紙表紙袋綴一冊題簽「新百人一首、並武家百人一首全」 武家百人一首を合綴。写本、一面二首二十五丁。奥に、

此百人一首ハ世に新百人一首と号して水戸義公の撰也と云。文政十三年十二月三鳥六郎政行の蔵書を以て写之 阿部 正信

撰者徳川光圀は寛永五(一六二八)―元禄一三(一七〇〇)七三歳で歿した。謚号は義公。

一八歳修史の志をたてて「大日本史」の編集のため、多くの学者を招き、古事記、旧事記、六

国史などの校正本や「扶桑拾葉集」をば撰び、万葉の註釈書「釈万葉集」を完成する等、好学の

大名として力を致すことが多かった。又、地方の学者を援助した円珠庵契沖の「万葉代匠記」

は、光圀の援助によって成ったもの一つである。光圀は、又和歌を好み、家集常山詠草を残

した。二巻本と五巻本がある。

この新百人一首は、撰集の時を明らかにしないが、おそらく晩年のものと思われる。歌は概

して、おだやかな自然詠や、明倫、国祝に近い歌が多く、光圀の思想を思わせるものがある。

後水尾院(一六一一―一六二九在位)を巻頭に出し御西院(一六五四―一六六三在位)を巻尾

に出している。中に、後柏原院、良純親王、後奈良院、後土御門院、後光明院、良愨親王、邦

高親王、尊純法親王など皇族、称名院入道前左大臣、逍遙院前内大臣、三光院前内大臣、鳥丸

大納言資慶、日野大納言弘資、二条前関白太政大臣康通、九条左大臣道房、飛鳥井雅章、近衛前

摂政太政大臣、飛鳥井雅直、中院前内大臣道村、鳥丸大納言光広等、殿上人や堂上派歌人を採っているが、更に徳川三代將軍を関東右大臣

源家光として出し、地下歌人ともいふべき、長嘯子はあげていない。更に、歌に意欲のあつた

下河辺長流や契沖もない。玄旨、宗祇、正徹、元政を採っているが、みな法師として出す。そ

の他僧名で出すもの僧正信玄、沢庵法師、公海法師、鴨山法師、道賢法師、賢俊法師、今西法

師、夢窓国師などで、その他は、尾張大納言光茂、松平伊豆守綱政、榊原式部大輔政芳、加

越能少将光高、広橋大納言兼賢、松平対馬守照重、蜂須賀阿波守光雄、伊達陸奥守政宗、浅井

備前守長政、など諸大名の歌を採っている。猶この百人一首の一つの特徴ともいふべきこと

は、女性の歌が多い。後花園院女孺、祖心官女句当内侍、御輝官女、毛利玄橋女、細川行高

母、源光通卿室女、讃岐守頼重女、秋田安房守室女、保科肥後守室女、瀬川采女室女、伊達宗

利室女、小出英直室女、三楽軒室女、松平大膳大夫室女、戸田茂睡息輪女、藤原頼母室女、永

井良徳室女、島津藩原忠興室女、藤原常友室女、藤原一本息女等二十人を出している。それ

ぞれ大名等の室女が多い。この新百人一首の撰集の意途は、必ずしも秀歌を撰ぶといふのでは

なく、歌人を主にしたものでもなく、どちらかといへば、作者をひろく採っており、近世和歌

の曙といった時代で、堂上地下をあわせて、温雅な作を集めたものと云えよう。



秀雅百人一首

緑亭川柳撰輯  
弘化五(一八六)正月

- 1 ひとこゑをここに惜しむな時鳥外の初音は今  
日ならずとも 祝部 清風
- 2 立田山もみぢをわけて入る月は錦につつむ鏡  
とぞ見る 円 珠
- 3 雨の夜の窓をうつにも砕くれば心はもろきも  
のにぞありける 明石 檢校
- 4 ふきかへて月こそもらね板びさしとくすみあ  
らせ不破の関守 相 阿 弥
- 5 夢をこそ結びかねつれ笹の葉に玉の緒とけて  
あられ降る夜は 道 無
- 6 手とりなべおのれは口がさし出たぞ雑炊たく  
と人にかたるな 一路 居士
- 7 天よりもかけりし梅の根につかば土よりもな  
ど花のひらけぬ 権 校 坊
- 8 尋ぬべき君ならませば告けてまし入りぬる山  
の名をばそれとも 児童 三河
- 9 いかにせん春の海辺もわすれねど雪のあした  
の住吉の松 宗 祇
- 10 思ふとしさくらかざしし宮びともかつらを折  
らぬ月のうらみは 牡丹花肖柏
- 11 風ならでとふ人もなき我がいほを軒端の松よ  
なれて久しき 宗 椿
- 12 山にても憂からむ里のかくれがや都のうちの  
松の下庵 豊原 統秋
- 13 しら菊としのぶの里の人とはば思ひ入り江の  
しまとこたへよ 白 菊

異種百人一首十種

- 14 あらひほす賤がつづれの棹つづみきなほさ  
ねばきられざりけり 農人 長助
- 15 亡き人の手向となせし法の花このみののこる  
世こそつらけれ 野本いさ女
- 16 咲くを待ち目かれぬ花も目に見えぬ風のさそ  
へばかひなかりけり 鹿子木親員
- 17 ゆくとしも空にしあはば我がやどの梅咲きた  
りと春につげこせ 山崎 宗鑑
- 18 秋ふかき小野の山風ふきおちて色こき稲のつ  
ゆぞこぼるる 蒼生 貞秀
- 19 老いたるもわかきも同じ朝顔の露よりもろき  
人の玉の緒 釈 春 朝
- 20 昨日なし明日またしらぬ人はただけふのうち  
こそ命なりけれ 今川 義元
- 21 吉野川瀬々の白波山越えて梢にかかる五月雨  
の頃 今川 氏真
- 22 津の国の難波のことのよしあしはなからん後  
の世に知られまし 鳥屋福寿丸
- 23 親ならぬ人さへかかる哀れぞと問はるる老の  
身をいかにせん 鳥屋九郎左衛門
- 24 山風のかなたこなたにさそふれば猶ちりの身  
ぞありか定めぬ 秋風道人残夢
- 25 来る雁と帰るつばめとおとなへど世にことづ  
てむ玉章もなし 福仙 無々
- 26 立ちならぶかひこそなけれ山ざくら松に千年  
のいろはならはで 武田 信玄
- 27 武士の鎧の袖をかたしきてまくらに近き初雁  
のこゑ 上杉 謙信
- 28 うつろひてやみにし人も立ちかへりまたやみ  
え来む宿のさくらに 小林 無外
- 29 世の中はただかりそめの草枕結ぶともなき夢  
とこそしれ 紹 鷗
- 30 釜ひとつもてば茶の湯はなるものをよろづの  
道具このむはかなさ 千 利 久
- 31 曙の雨とや見えむ吉野山常盤木までも花のあ  
らしに 里村 紹巴
- 32 立帰る千代のはじめの春日かげいづるひかり  
もわきてのどけき 鼠棧栗新左衛門
- 33 水鳥の水に入りても羽もぬれず海の魚とて塩  
もしみめや 覚阿 上人
- 34 空蟬の羽よりも薄き身を持ちてつくしよしと  
はいかていふべき 深水 宗方
- 35 風よりも烈しき人の心にて手ごとに折りし花  
の枝かな 木山 惟久
- 36 いにしへは恨みかこちし鐘の音を待ちわびて  
きく老のあかつき 林 梅林
- 37 かぎりあれば吹かねど花はちるものを心みじ  
かき春の山風 蒲生 氏郷
- 38 わたらじなせみの小川の浅くとも老の彼そふ  
かげもはづかし 詩仙堂文山
- 39 山ふかくすめる心は花ぞしるやよいざさくら  
物語りせん 長 嘯 子
- 40 よしあしと人の上のみいひしかど言葉にも似  
ぬわが心かな 三浦 茂正
- 41 なかなかにことたらぬ身はのどかにて春にも  
まさる年のくれかな 猪尾 常房
- 42 武士の花の数には入らずとも散りなん時は桃  
もさくらも 桃田 金平

43 松浦瀉かたぶく月は唐土のはてのはてまで見  
る心かな 松永 貞徳

44 しづむともほどはあらじなこよろぎの五十路  
あまりの波の捨舟 妙寿院惺窩

45 ももとせも猶あきたらず行くすゑを思ふ心ぞ  
ものわらひなる 江村 専斎

46 ひとりすむ庵とはいはじよなよなに我がかけ  
そへて月をみるかな 沢庵 和尚

47 ねざめしてわか暁をまつの戸におとせぬ風の  
いろをきくかな 松花堂昭乗

48 古塚のしるしの柳心あらばいざこととはむ昔  
しるやと 狩野 常信

49 物いはで我にそむかぬ友どちは枕に近くとも  
すともし火 中山 三柳

50 ひとりわが着てもかへらぬから錦亀田やなに  
のふるさとの山 下河辺長流

51 露の身は松におくとも千代もへじよし朝顔の  
上にきえなん 阿闍梨契沖

52 吉野山花まつころの朝なあさな心にかかる峯  
のしらくも 佐川 田昌俊

53 それと見し雪解のくもはふきはれて梅が香お  
くる夜の春風 田宮坊太郎

54 ふると見ば積らぬさきに払へただ風吹く松に  
雪をれはなし 中江 藤樹

55 つたへ来て春は神代にははらぬを人のこころ  
ぞ昔には似ぬ 熊沢 了介

56 心にも及ばぬものは何かあると心にとへば心  
なりけり 深草 元政

57 露霜の白きをおのが心にて今朝くれなるにそ

58 得とらず損をもせざるいとなみは苦にもなら  
ねば楽とおもはず 白鳥 永徳

59 花も見つ時鳥をも待ち出でつこの世のちの世  
おもふことなし 北村 季吟

60 無漏路より通り手形の法悟得て有漏路行脚の  
関ぞ明けぬる 大淀三千風

61 をしめをしむ身さへ骨さへ皆朽ちて残るはの  
ちの名のみならずや 渡辺 幸庵

62 武蔵野の草はみながらおく露の月をわけゆく  
秋の旅人 灰屋 重孝

63 おなじ世にふるをたのみの年月をあだにもつ  
もる庭のしら雪 傾城 瀬川

64 山風のたたく夕べは聞きすてておとなき月に  
明くる柴の戸 土肥二三翁

65 のがれかね世にふりはてし老の身はかくれ住  
むべき山なしのもと 隠家 茂睡

66 慎みを人の心の根としれば言葉のはなまこ  
とにぞきく 吉川 惟足

67 来しかたは一夜ばかりの心してやそとせまり  
の夢ぞみじかき 貝原 篤信

68 かくて世に住むともいはじ岩倉や松よりほか  
に友もなき身は 帰 命 坊

69 我が門の五もと柳枝たれて長き日あかぬうぐ  
ひすのなく 物茂卿徂来

70 花にうかれ知らずくらしつあしぎたの山鳥の  
尾の長き日かげを 池田 正武

71 ややや狸、まし鼓うて、琴ひかん、我琴ひか  
ばまし鼓うて 縫 庵

72 上の上限りもあらじ我よりも下の下なる人を  
見るべし 伊藤 仁斎

73 をしぞとの歌にひかれてその舟のすがたあら  
はせ夜の梅が枝 間瀬 正明

74 老いぬれば余所になされていにしへを語るを  
だにも聞く人のなき 小野寺秀和

75 ながらへて花を待つべき身ならねど猶をしま  
るる年のくれかな 大石 良雄

76 富士の雪とけて硯の墨衣かしくは筆の終なり  
けり かしく坊

77 夕栄えの花をば闇になさじとや暮れはてぬ間  
に月のいづらむ 細井 広沢

78 まぎらかす浮世のわざのくまどりもあるとや  
月の薄墨のそら 英 一 蝶

79 身はつひに朽ちやはてなん思ふとも道へだて  
たる谷のうもれ木 傾城 勝山

80 笈といふものしあらずは草枕かたしく旅に袖  
やかわかむ 浮 沈 斎

81 露の身をおくばかりなる草の庵結ばんとすれ  
ば山風ぞ吹く 似雲法師

82 のこれとは思ふもおろか埋火のけぬまあだな  
るくち木垣して 近松門左衛門

83 みづはぐむ老が住家を爰としれ門にしるしの  
杉はなくとも 三輪 執斎

84 泊瀬路や初音きかまく尋ねてもまたこもりく  
の山ほととぎす こもりくの翁

85 何事も見るめかひある国なれや爰ぞうき世に  
住吉の浜 室 鳩 巢

86 その名さへ雲井ときけば及なきみはしの月よ

いかにすむらむ

成嶋 道筑

87 明けやらぬ老の寝ざめの鳥の声おどろかされ  
し夜半もありしに 天野 信景

88 達磨さへおあしでわたる難波江のながれを汲  
める老のわが身ぞ 売 茶 翁

89 手束弓紀のせきもりのゆるさねばいることか  
たき三熊野の山 東儀 頼母

90 けふ見ればきのふの淵はあさか潟汐のみちひ  
ぞ世のすがたなる 荷田 春満

91 しもつけや神のしづめし二荒山ふたたびとだ  
に御代は動かじ 賀茂 真淵

92 しき島のやまと心を人とはば朝日に匂ふ山ざ  
くらかな 本居 宣長

93 あら楽やはなも紅葉も忘れては風の吹く夜も  
しらずねにけり 新井 白蛾

94 世に出ずは又とは越さじ我が為の命なりけり  
佐夜の中山 仲山 仲吉

95 秋ふかき庭の籬にいろそへておきそむるらむ  
露のしら菊 石川 為蔵

96 わが涙雨と降りなし三途川水量ましつよみ  
がへるがに り つ 女

97 有磯海のいはほこごしみこえかねてよるよる  
かへる沖つ白波 小沢 蘆菴

98 ことのはの及ばぬ身には目に見ぬもなかなか  
よしや雪の富士の根 埜 檢 校

99 天の下しづけかる世にあへる身はさらにみ山  
の奥はもとめじ 橘 千蔭

100 高砂の松はあらしも聞えけり君が千歳のかげ  
ぞのどけき 香川 景樹

異種百人一首十種

〔解説〕青表紙袋綴木版一冊。題簽「秀雅百人一首」緑亭川柳輯、弘化五歳戊申発兌。版元錦耕堂。諸家集筆出像。はじめに、武南金水漁人関日秋夷の漢文の序あり。ついで、

京極黄門の撰給へる小倉の百首は、遠く世の中に伝はりて鄙の乙女子までも読覚えざるはなし。さればそれに基きて、かしくも英雄列女の歌をしるしし物を梓に多しに、幸にして書肆蕪液となれる故にや、なほこれに類せし物集めてよと乞ふ事しばしばなれば、否むに術なくことうけしつれど、いにしへより歌かきし書いくばくぞ、空なる星のごとくなるを、細き管もて見わくべきにあらねば、玉しきのかしこきかみさまの事はさしおき、よの人のかたりつぎしものふの詞、又は芦ふぶきのこやの塵に交りて月花を楽しみしたぐひ、山田もる農夫、市に荷ふ商人、或はありかさだめぬ桑門など、たかきみじかきをいはず、ここに伝へたるふること、かしこにちりたることのは、風のつてに聞るを悦びおろかなる筆に任せ、入江の藻屑さまさまなる書きとめ、秀雅百首とは名づく。海士のうけ船心一つに定めぬることなれば、くれは鳥あやまり多く、ひがことはつくば山のはよりもしげければ、梓弓ひきみむ人の嘲もはづれがたくおぼゆれど、ただうなる子どものもてあそびのためにせんとほこらしげにうち思ふままにしるす。弘化五戊申孟春吉且緑亭川柳。と川柳の自序。更に例言あり、

此百首に書きのせし歌、そのよしあしは知らねど、只めでたき歌、或は徳ある人、または貧しくとも雅に富みたる人をのみのせぬれば世に聞えたるも除かれ、させる作者ならぬも入ぬれど、それは数おほき幸なれば、是を好み彼を嫌ひ、強ひて落すにあらざ。もとより学ぶことなく簡編に乏しく、只わづかに見聞るところを記しぬるが故なり。又聊か不審なるは省き、且広く求めなば、隠れたる人をも得ぬべけれど、それは次郎百首の例もあれば拾遺のとき入るべし。

作者の伝ことしげくいと長きもあれど各巾子の限りあれば抄略してもらせること多し。只児童の聞き易からむことのみをしるす。歌小伝とも書抜きし引証をことごとく誌さまほしけれど、余紙なければ是をも洩しつ。すべて鄙俚書または拔書などより出しても多く本のまま誌しぬれば、歌のことたがひて誤りもありなん、其ことに悉しき人おはして、もし改めよと告げし給はばおのれが悦びはさらにもいはず、其歌ぬしの冥府にありていかに嬉しとおぼさざらむや

とある。上欄に逸話等を記して読みものとして堪える為の人撰でもあるが、近世における歌人として、契沖、宗祇、肖柏、残夢、長嘯子、長流、元政、季吟、似雲、春満、宣長、芦庵、千隠、景樹と撰んでいる。道歌、狂歌に類するものも多く、秀雅というが、大衆に迎えてとは云えまともな秀歌の百人一首とは云い難い。

古今集百人一首

大森盛頭撰輯  
嘉永五(一六三三)春

- 1 いぬかみのとこの山なるいさや川いさとことた  
へよわが名もらすな 天智天皇
- 2 山科の音羽の滝のおとにだに人のしるべく我  
がこひめやも 近江 采女
- 3 年のうちに春は来にけり一とせを去年とやい  
はむ今年とやいはむ 在原 元方
- 4 雪のうちに春は来にけり鶯のこほれる涙今や  
とくらむ 二条 后
- 5 春の日の光にあたる我なれどかしらの雪とな  
るぞわびしき 文屋 康秀
- 6 春やとき花やおそきとききわかむうぐひすだ  
にも鳴かずもあるかな 藤原 言直
- 7 谷風にとくる氷のひまごとにうち出つる波や  
春の初花 源 当純
- 8 春たてど花も匂はぬ山ざとはものうかる音に  
鶯ぞなく 在原 棟梁
- 9 鶯の笠にぬふてふ梅の花をりてかざさむ老か  
くるやと 東三条左大臣
- 10 年経ればよはひは老いぬしかはあれど花をし  
見れば物思ひもなし 前摂政太政大臣
- 11 桜いろに衣はふかく染めてきむ花の散りなん  
後の形見に 紀 有友
- 12 桜花ちらばちらなん散らずとて故里人の来て  
も見なく 惟喬親王
- 13 いざ桜花もちりなんひとさかりありなば人に  
うきめ見えなん 承均法師
- 14 たれこめて春の行方もしらぬまに待ちし桜も  
うつろひにけり 典侍藤原因香朝臣
- 15 枝よりもあだに散りにし花なればおちても水  
のあわとこそなれ 菅野 高世
- 16 春風は花のあたりをよきて吹け心づからやう  
つろふと見む 藤原 良風
- 17 春雨のふるは涙かさくら花散るをしまぬ人  
しなれば 大伴 黒主
- 18 ふるさとと成りにしならの都にも色はかはら  
ず花はさきけり 平城天皇
- 19 散る花の泣くにしとまるものならば我うぐひ  
すにおとりましやは 典侍冷子朝臣
- 20 花の散ることやわびしき春がすみたつたの山  
のうぐひすのこゑ 藤原 後蔭
- 21 かはづなく井出の山吹ちりにけり花のさかり  
にあはましものを 橘 清友
- 22 声たえず啼けやうぐひす一とせに二たびとだ  
に来べき春かは 藤原 興風
- 23 ややや待て山ほととぎすことづてむわれ世の  
中に住みわびぬとよ 三国 町
- 24 夏の夜のふすかとすれは郭公なく一声にあく  
るしののめ 紀 貫之
- 25 秋風に声をほにあげてゆく舟は天の戸わたる  
雁にぞありける 藤原菅根朝臣
- 26 秋の野におく白露は玉なれやつらぬきかくる  
くもの糸すち 文屋 朝康
- 27 女郎花秋の野風にうちなびき心ひとつを誰た  
れによすらむ 左大臣時平
- 28 秋ならで逢ふことかたき女郎花天の河原にお  
ひぬ物ゆゑ 藤原定方朝臣
- 29 女郎花うしろめたくもみゆるかなあれたる宿  
にひとり立てれば 兼 覽 王
- 30 紅葉せぬときは山は吹く風のおとにや秋を  
ききわたるらむ 紀 淑 望
- 31 同じ枝をわきて木の葉のうつろふはにしこそ  
秋のはじめなりけれ 藤原 勝臣
- 32 秋風の吹上げに立てる白菊は花かあらぬか浪  
のよするか 菅原 朝臣
- 33 霜のたて露のぬきこそよわからし山の錦のお  
ればかつ散る 藤原 関雄
- 34 さほ山のははその色はうすけれど秋はふかく  
もなりにけるかな 坂上 是則
- 35 白雪の所もわかずふりしけばいはほにもさく  
花とこそ見れ 紀 秋岑
- 36 かくしつつともかくにも長らへて君が八千  
代に逢ふよしもがな 光孝天皇
- 37 かめのをの山の岩根をとめておつる滝の白玉  
千代のかずかも 紀 是岳
- 38 けふわかれあすはあふみと思へども夜や更け  
ぬらむ袖のつゆけき 紀 利貞
- 39 わかれてはほどをへだつと思へばやかつ見な  
からにかねて恋しき 在原 滋春
- 40 思へども身をしわけねば目に見えぬこころを  
君にたぐへてぞやる 伊賀子敦行
- 41 相坂の関しまさしきものならばあかずわかる  
る君をとどめよ 難波 万雄
- 42 白雲のこなたかなたに立ちわかれ心をぬさと  
くだく旅かな 良岑 秀岳

43 もろともになきてとどめよきりぎりす秋の別  
れはをしくやはあらぬ 藤原 兼茂  
44 秋霧のとも立ち出でて別れなば晴れぬ思ひ  
に恋ひやわたらむ 平 元 規  
45 いのちだに心にかなふものならば何か別れの  
かなしからまし 白 女  
46 人やりの道ならなくに大かたはいきうしとい  
ひていざかへりなん 源 実  
47 ほのぼのとあかしの浦の朝霧に嶋がくれゆく  
舟をしぞおもふ 柿本 人麿  
48 山かくす春の霞ぞうらめしきいづれみやこの  
さかひなるらむ 乙  
49 夕づく夜おぼつかなきを玉くしげ二見の浦は  
あけてこそ見め 藤原 兼輔  
50 一とせに一たび来ます君待てば宿かす人もあ  
らじとぞ思ふ 紀 有常  
51 かのかたにいつからさきにわたりけん波ちは  
あともこのらざりけり 阿保 経覧  
52 秋くれど月のかつらの実やはなるひかりを花  
とちらすばかりを 源 忠  
53 思ひつつぬればや人の見えつらむ夢と知りせ  
ば覚めざらましを 小野 小町  
54 つつめども袖にたまらぬ白玉は人を見ぬめの  
泪なりけり 安倍清行朝臣  
55 かきくらし降る白雪の下きえに消えてものお  
もふ頃にもあるかな 壬生 忠岑  
56 はかなくて夢にも人をみつるよはあしたの床  
ぞおきうかりける 素性法師  
57 ことに出ていはぬばかりぞみなせ川下にかよ

異種百人一首十種

ひて恋しきものを 紀 友則  
58 梓弓ひけばもとすゑわがかたによるこそまさ  
れ恋の心は 春道 列樹  
59 あはずして今宵明けなば春の日のながくや人  
をつらしと思はむ 源宗平朝臣  
60 あやなくてまだきなき名の立田川わたらでや  
まんものならなくに 御春 有助  
61 かきくらす心の闇にまどひにき夢うつとは  
世人さだめよ 在原業平朝臣  
62 花すすきほに出でて恋はなををしみ下ゆふひ  
ものむすぼほれつつ 小野 春風  
63 君といへば見まれ見ずまれふじのねのめづら  
しげなくもゆるわが恋 藤原 忠行  
64 かれはてん後をばしらで夏草のふかくも人の  
おもほゆるかな 凡河内躬垣  
65 恋しとは誰か名づけけむことならむしぬとぞ  
ただにいふべかりける 清原深養父  
66 たえず行くあすかの川のよどみなば心ありと  
や人の思はん 中臣 東人  
67 くもりひのかげとしなれる我なれば目にこそ  
みえね身をばはなれず 下野 雄宗  
68 今はとて返す言の葉ひろひおきておのが物か  
ら形見とやみむ 近院右大臣  
69 花すすきわれこそしたに思ひしかほにいいで  
人にむすばれにけり 藤原仲平朝臣  
70 ひとりのみ詠めふるやのつまなれば人をしの  
ぶの春ぞおひける 貞登 朝臣  
71 吹きまよふ野風をさむみ秋はぎのうつりもゆ  
くか人の心の 雲林院親王

72 から衣なれば身にこそまつはれめかけてのみ  
やは恋ひんと思ひし 景式 王  
73 しでの山麓をみてぞかへりにしつらきひとよ  
りまづこえじとて 兵 衛  
74 時すぎてかれゆく小野のあさちには今は思ひ  
ぞたえずもえける 小町 姉  
75 冬枯の野辺とわが身を思ひせばもえても春を  
またましものを 伊 勢  
76 蟹の刈る藻にすむ虫のわれからとねをこそな  
かめ世をはうらみじ 典侍藤原直子朝臣  
77 花よりも人こそあたになりにつれいづれをさ  
きに恋ひんとかみし 紀 茂行  
78 露をなどあたなるものと思ひけん我身も草に  
おかぬばかりを 藤原 惟元  
79 ぬしや誰とへど白玉はなくなにさらばなべて  
や哀れと思はん 河原左大臣  
80 かたちこそみ山かくれの朽木なれ心は花にな  
さばなりなん 兼芸法師  
81 大空をてり行く月し清ければ雲かくせども光  
けなくに 尼 敬 信  
82 老いぬればさらぬ別れもありといへばいよい  
よ見まくほしき君かな 伊登内親王  
83 都までひびきかよへるからことは浪のをすげ  
て風ぞひきける 真静法師  
84 きよ滝のせぜの白糸くりためて山別衣おりて  
きましを 神退法師  
85 ぬしなくてさらせる布をたなばたにわが心と  
やけふはかさまし 橘 長盛  
86 おもひせく心のうちのたきなれや落つとはみ

## 三条 町

れど音のきこえぬ  
 87 都人いかにととはば山高みはれぬ雲井にわぶ  
 とこたへよ  
 小野 貞樹

88 世のうきめみえぬ山路へいらんには思ふ人こ  
 そほだしなりけれ  
 物部 美名

89 木にもあらず草にもあらずぬ竹のよのはしに我  
 が身はなりぬべらなり  
 高津内親王

90 思ひきや鄙のわかれにおとろへてあまのなは  
 たぎいさりせんとは  
 小野篁朝臣

91 わくらばにとふ人あらばすまの浦にもしほた  
 れつつわぶと答へよ  
 在原行平朝臣

92 つくばねのこのもとごととにたちぞよる春のみ  
 山のかげを恋ひつつ  
 宮道 潔興

93 神な月時雨降りおけるならのはの名におふ宮  
 のふることぞこれ  
 文屋 有孝

94 ふじのねのならぬ思ひにもえばもえ神だにけ  
 たぬむなしけぶりを  
 紀 乳 母

95 秋の野に妻なき鹿のとしをへてなぞわが恋の  
 かひよとぞ啼く  
 紀 淑人

96 逢ふことの今ははつかになりぬれば夜ふかか  
 らでは月なかりけり  
 平 中 興

97 よそながらわがみにいとよるといへばただ  
 偽りにすぐばかりなり  
 源 久 曾

98 ねぎごとをさのみ聞きけんやしろこそはては  
 なげきの杜となるらめ  
 讚 岐

99 わがせこがくべきよひなりささがにのくもの  
 ふるまひかねてしるしも  
 衣 通 姫

100 つるかめも千年の後はしらなくにあかぬ心  
 まかせはてむ  
 在原 時春

○

〔解説〕刊記に佐藤光覧画、前島祐利書、嘉六  
 癸丑春新刻。須原屋茂兵衛とあり、序に

古しへ、もろこしの聖の、言の葉に、遠ぎに  
 行くは、必ば近きよりするが如く、高きに登  
 るは必ず、低きよりするが如しと、げに、世  
 の中のわざ、易きよりして、難きには入るな  
 り、まいて、文読み手習ふわざなどもさなら  
 んにこそあらめ。今の世の女の童に文読習は  
 する初めには、おふなおふな歌の道をも字ば  
 せんとにや、百人一首をよみ教ふることとは  
 なりにけり。我つねに行き通ふやごとなき御  
 方に、いとさなき娘一人持たり給ひて今年八  
 つになり給ふが、生れつきいと利くおはし  
 て、百人一首をもよみならひ覚え、そらよみ  
 し給ふなるに、親たちはいとめでたく頼もし  
 と覚し給へりけるが、或日とひけるに、かの  
 娘の、古今和歌集一首撰といへる巻を、読み  
 る給ふを見れば、古今集のうちに、ある人々  
 のかぎり、名をしるせし歌一首づつぬき集め  
 あげたるなりけり。こは、誰人の撰めるにや  
 と問ければ、其の母君の答へ給ふは、娘の、  
 百人一首よみならひおはりけるが、猶次ぎて  
 この巻にたぐひせるをもとめえてよませてん  
 と思ふに、見あたらねばうちたえしが、大森  
 盛頭大人に乞ひてかばかりのうた数えらび給  
 はれといふに、そがたぐひ数多くあれば、別  
 に撰まんまでもなし、などいひ給ひければ、  
 されどそはみな歌数多くて、いとけなければ

七〇

よみ倦みぬべきにと切に請ひてければ、古今  
 集のうちより撰びいでて給ひしなりけりとあ  
 るに、げに女の童のもてあそびならはんに  
 は、歌数あまたならぬはたよりよからんと思  
 ふに、此のまま世に絶えんもいと惜しく思ひ  
 て、盛頭うしの家とひて、板にゑらせ文よみ  
 ならふ女の子に与へん事を乞ひけるに、こは  
 乞はれしままに、なほざりに、拾ひ書けるな  
 ればきわめて洩れたらん人もあるべきに、さ  
 るわざして世の人にあざけれんも恥ぢがま  
 しければ、そがままに、うちすてねとありけ  
 れど、猶せちに乞ひければ、ゆるし給ふによ  
 りて、このみかたち画かかせて板にえらせた  
 るなりけり、こは嘉永五の年の睡月在原正高  
 しるす。

とあつて成立の事情が明らかである。もと童蒙  
 の百人一首ではあるが、十才の童女が忍恋、逢  
 不逢恋などという題詠をこなす時代であるか  
 ら、世に名歌とされるものは恋歌も多く採つて  
 いる。大体巻の順に抄いてある。

古今集は、作歌の聖典のごとく重んぜられた  
 集であるから、この外にも古今集百人一首の撰  
 はある。この様に撰集の中から抄いて百人一首  
 にしたものもある。明倫歌集から抄いたという  
 明倫百人一首や、夫木抄から撰んだ夫木百人一  
 首などあり、源氏物語の作中人物の作を集めた  
 黒沢翁満の源氏百人一首という書も出版されて  
 いる。もっとも、源氏物語百人一首は、作中人  
 物百人で実の作者は紫式部一人である。

現存百人一首

鋤柄助之撰輯  
安政七(二六)一月序

- 1 墨田川つつみの桜くれそめてかすみになりぬ  
今戸いしはま(水郷夕霞) 小林 歌城
- 2 菅の根のながき春日のくるるまで見れどもあ  
かぬ花ざくらかな(終日見花) 蜂屋 光世
- 3 片岡のもりのしめなはしめやかに霞むをみれ  
ば春雨のふる(社頭春雨) 井上 文雄
- 4 岩がねに友よぶ熊の声さえてふぶぎにくもる  
えぞの海つら(海辺雪) 小笠原長儀
- 5 蓮葉のひかりすずしき露のまにこぼれもはて  
ずあくる月かな(夏月易明) 前田 夏蔭
- 6 花にうけ名のみは風のおはじとや梢がえだに  
あはれみすらむ(春風) 杉山 久蔭
- 7 おろかなる心に身をばまかせじと思ふものか  
らかつそむきつつ(述懐) 松平 忠敏
- 8 消えぬにぞ雪とは思ひはてぬともちる花寒し  
春の池水(池落花) 清水 光房
- 9 夏の夜のふすともあらぬ手枕に見はてぬ夢の  
惜しくもあるかな(夏夢) 那須田鶴子
- 10 東路のあら野の露にうつろひぬなれし都のそ  
での花染(羈中衣) 村田 春野
- 11 衣手にけさおきそむる露みればたもとよりこ  
そ秋は来ぬらめ(初秋衣) 森川 利茂
- 12 夕霧は野山をかけてたちぬれどもものあはれ  
はかくれざりけり(霧) 仲田 顕忠
- 13 待宵の衣にくゆらす空だきも更けてはむねの  
けぶりなりけり(寄煙恋) 岡部 秋子

異種百人一首十種

- 14 我がものと思ひし門の山みづはこよひも月の  
すみかなりけり(門月) 高木 茂標
- 15 ものの音の響きに玉と散りにけり雲居の夜の  
はぎの上つゆ(萩) 池田 三信
- 16 霖雨に声もしをれぬ鶯は梅の花がさきてや鳴  
くらむ(雨中鶯) 町野 資礼
- 17 薄衣袖吹く風ぞなつかしき花にいとひし名残  
なれども(夏風) 万年 頼徳
- 18 とるたびにまづは心の正されて筆のいさめを  
忘れやはする(筆) 山内 豊城
- 19 降りつもる雪の夕べのしづけさはものの音さ  
へかすみはてけむ(夕雪) 橋本 広臣
- 20 衣うつ音ぞ流るるこはた川こは誰が夢をおど  
ろかすらむ(河辺禱衣) 久米八十子
- 21 世の塵をかどの柳にはらはせて花をよそにも  
住む人やたれ(門柳) 善林寺紹識
- 22 恋すれば心幼くなりけりすかさるるだにな  
ぐさめにして(寄小児恋) 長尾 通広
- 23 夕立の雲のはたてに風みえて軒ばすすしき雨  
のおとかな(夕立雲) 加藤 一周
- 24 春来ぬと三保の浦松かすむなりめちはるかな  
る浪のみどりに(浦早春) 桜井 阿誰
- 25 岩くぐるまつがね清水それのみは冬にもれて  
も氷らざりけれ(冬地儀) 林 甕臣
- 26 かざりなき君が御代には十かへりの松もいく  
度花さかすらむ(慶賀) 三田花朝尼
- 27 嬉しさも憂きも一つに思ひ出でてわすれ難し  
や人のおもかげ(難忘恋) 岩淵 孝則
- 28 かざりある秋のまがきも白菊の花は盛りに句  
ひぬるかな(籬菊) 小堀 政醇
- 29 いつしかと心に松をうゑつるや春のいそぎの  
はじめなるらむ(松) 間宮 永好
- 30 村時雨そめてあらひておろしくる落葉にひか  
る夕づく日かな(夕落葉) 大野 定子
- 31 瑞枝さすをちの山もと一むらの里ありけりと  
みゆる卯の花(遠村卯花) 鈴木 知足
- 32 むら雀片よりすなり御狩野にとやでの鷹の風  
ながれして(鳥狩) 阿野 通文
- 33 秋風に乱れし庭をけさみれば尾花が袖も萩の  
花ざり(秋草) 内藤 忠周
- 34 思ふどち語る雨夜のほととぎす名のらば声の  
しなだめせむ(待時鳥) 津田理照尼
- 35 山まども羽蟻たつ日となりけり麓の花は今  
か咲くらむ(春虫) 瀬戸 久敬
- 36 うなる子がさす手ゆたかにさかづきのまき絵  
の山もまづ霞みつつ(元日) 白石 長忠
- 37 塵つもる枕の山は宵々になげきのみこそ生ひ  
まさりけれ(寄枕恋) 小池 魚群
- 38 ゆかりありて誰が一夜寝し名残よりすみれの  
床の露けかるらむ(朝菫菜) 勝林寺心誠
- 39 一年の寝ぬ夜にかへて棚機はけふをさる日と  
忌まずやあるらむ(七夕庚申) 横山 由清
- 40 朝庭の雀の声をしづめつつひとこゑたかくな  
る鶯(朝鶯) 関 知雄
- 41 磯山のから紅のもみぢ葉はしほのやしほの風  
や染めけむ(磯紅葉) 桜井 惟時
- 42 けふ見ればみな白雲となりはてて花こそなけ  
れをはつせの山(名所花) 川辺 一也

- 43 もしほ焼くけぶりの末の一すちは浦波とほく  
かへる雁がね(浦帰雁) 三島 景衡
- 44 春日野の草のわか葉にゆふかけて遊ぶところ  
は神ぞしるらむ(夕野遊) 山田 常典
- 45 ながむれば霞の中にひとときはのしろきや梅の  
さかりなるらむ(霞中梅) 金谷 直恒
- 46 市人のさわぐ方より夕立のおひくるばかり降  
りかかりけり(市夕立) 権藤百々丸
- 47 ほのぼのと明けゆく空に塵もなし霞むあなた  
やうき世なるらむ(閑中春霞) 所 光被
- 48 雁鳴きて月さすなべに來ませるはとこよの国  
の仙人かそも(客伴月來) 秋園 古香
- 49 芳野山いざゆきてみむ桜花待つ間を旅の日数  
にはして(待花) 福田 元長
- 50 藻汐草かりふく蟹が磯屋まで白浪よする海づ  
らの里(海村) 福知 兢
- 51 妻こふる焼野のきぎす声たててかげもあらは  
に鳴くがあはれさ(雉子) 松村 野逸
- 52 何事もひらけゆくめる世にあひて野へは狭く  
もなりにけるかな(野) 葉茗 清足
- 53 皇国は神代のままの道しあればことなるふみ  
のをしへ何せん(述懷) 笠倉 延平
- 54 夜のほどにはや咲きみちて有明の月かげおほ  
ふ花のしら雲(暁花) 長田 古文
- 55 吹くからに声たてつべくなりにけり心のまつ  
も風やとふらむ(風声催恋) 伊東 祐命
- 56 けしきある雪みむためとうゑおきしかきねの  
松もうづもれにけり(松雪) 細井 信子
- 57 唐種のものなりながらさかゆくは木の芽の香  
をや神もめづらむ(茶) 堀野 義礼
- 58 すみれさく野中の道に行きくれぬ雲雀の床や  
一夜からまし(夕雲雀) 田中 保佑
- 59 夏草の茂る中にもわすれ水ありやとひるも鳴  
く水鶏かな(水鶏) 寂靜院榮真
- 60 夏山にかへる鶯こととはむ青葉がくれに花や  
のこると(余花何方) 篠崎 長命
- 61 夜もすがら梅が香ふかき旅枕あれたる宿のと  
りどころなる(旅宿梅) 石崎 恒房
- 62 かはりゆく人の心のあき風はおとづれぬにぞ  
おどろかれぬる(変恋) 権田 千寛
- 63 なつかしく霞める月を春の夜の空にのこして  
帰る雁がね(帰雁) 淨徳寺円諦
- 64 一声はなかなかつらしほととぎす聞かぬより  
はと思ひかへせど(時鳥一声) 速水 忠正
- 65 後瀬山のちにめぐるは染め残る木々をたづね  
て降るしぐれかも(名所時雨) 海老原秀之
- 66 春の日も外山のかたにくれそめていよいよ花  
は雲となりనికి(春夕) 青木 義処
- 67 人知れず越えむと思ひし逢坂の関のへだてを  
いかにかはせん(寄関恋) 真竜寺貞松尼
- 68 青柳のいとより細き三日月の影おぼろにもか  
すむ春かな(春月) 彦坂 真久
- 69 朧夜をやがてすずしくみし影のひかりそひゆ  
く秋の月かな(月) 山田 仙翁
- 70 春たつといひくら山の朝がすみしめの内外に  
棚引きにけり(社頭霞) 鏑木 幸雄
- 71 竹田人としある秋にあふこもてになふ重荷や  
嬉しがるらん(秋祝) 高本 康哉
- 72 ふるさとの春に心のいそがずは花の夜床やお  
きうからまし(旅宿花) 武谷 機子
- 73 更けぬるかもの音たかく聞ゆなり神もみか  
さの森の夜神楽(杜神楽) 下田 重則
- 74 のどかなる人の心につつ春を向ふるものと思  
ひけるかな(立春) 加藤 千浪
- 75 東路のはまなの橋の月みつと都の人にいつか  
語らむ(名所月) 西田 稻雄
- 76 落ちたぎつ滝のさ霧にぬれぬれて紅葉色こき  
み吉野の山(滝紅葉) 西村 光一
- 77 手にむすぶ野への清水もうづもれて秋待つ草  
ぞおのがままる(夏草滋) 田内 千町
- 78 よの中を思ひつづけてながむれば夕への雲に  
秋風ぞ吹く(秋雲) 若泉 清蔭
- 79 うちなびく岸の柳にはらはれて螢乱るる河づ  
らの里(水辺螢) 清水 謙光
- 80 日かげみぬ山下ぬまのあやめ草あすは都に夏  
をしるらむ(菖蒲) 河野 三貫
- 81 秋の田のほにあらはれてみゆるかな雨にも植  
えし心づくしは(秋田) 吉田 定顕
- 82 夏ながら身にしむばかり澄む月に秋もかよふ  
か西川の水(河夏月) 瀬谷 如春
- 83 さくら見て人は散りにし夕河の岸の山吹今さ  
かりなり(夕山吹) 佐藤 信古
- 84 雲はらふあらしは松にやすらひて虫の音たか  
くすめる月かな(月前虫) 福島 千尋
- 85 高砂の尾の上にさゆる鐘の音におとせぬ霜の  
深さをぞしる(暁霜) 堺 景恭
- 86 苗代の水にちり浮く花みれば蛙もうたふ種は



ありけり(蛙)

吉田 敏成

77 なかなか宵より晴れし影ならばただおほか

塙 忠宝

78 人ごとに汲む若水のみづ鏡たが若がへる春を

菊地 正脩

89 露深き軒端の萩をすむ月のかげにたわむとお

もひけるかな(月前露) 草野 御牧

90 ことしまた花になれつつ春の日を長きものと

も思はざりけり(毎年愛花) 村山 正隆

91 ちからなき身を歎くかなものふの世にたつ

か弓手にはとれども(弓) 寺山 吾鬻

92 曆こそ巻きつくしけれ年のうちにみはてぬ書

の多くもあるかな(学者惜年) 千坂 幾

93 ほろほろと桐の葉落つる夕風に人の泪もとま

らざりけり(秋夕傷心) 伊庭 秀賢

94 木のもとによし暮れぬともさくら花かすめる

月の入るまでをみむ(翫花) 小沢 安信

95 風わたる空に夕日の影みえて松原づたひ行く

しぐれかな(夕時雨) 久松 祐之

96 友もがなとへかし春の雨の夜に柳さくらのし

なさだめせむ(夜春雨) 力石 重遠

97 筏士のくだす年木のはや瀬川はやくもとしの

くれてゆくかな(歳暮如流) 那須 資礼

98 山城のこはたの関を朝こえてかへりみすれば

かすみ棚引く(関露) 有田 吉順

99 おもしろく霞ながるるおほ空にしづく玉江の

春の夜の月(名所春月) 辻 守静

100 ものふといふもはづかし月花のやつことな

りて過ぐるこの身を(述懐) 天野 政徳

異種百人一首十種

○

〔解説〕「現存百人一首」刊、中本、袋綴一冊。安政七年一月成る。萩園主人加藤千浪撰(序)刊記なく、板元、刊年不明。序あり。

かた糸のおのが心の引くかたにのみえらび出でたるはいかにぞやかたぶかるるふしもあるを、ひとの大かたよしと聞きおけるは、まことに世にゆるされたる歌とはいふなるべし。さてこの現存百人一首は、鋤柄助之ぬしの年頃聞きつたへて耳に残れるを、やがてかき集めてものしつるにて、わたくしにさだめたるならねば、とかくいふ人もあらぬなるべし。此の頃ひろくあつめし武蔵野集につみのこせる言の葉、大江戸集のあまねきめぐみにもれたるをひろひ集めて一卷となしたれば、いとめでたき集ともいふべきを、ただこのはし書ののし玉の祥ある巻の疵にこそ。安政七とせむ月、萩園主人千浪

序を書いた加藤千浪(一八一〇—一八七七)は、奥州白河の生れて、岸本由豆流の門人、江戸末期から明治初年にかけての歌人で、「詠史百首」などがある。ここに云っている「武蔵野集」「大江戸歌集」は、幕末の集で、その頃盛行を見た撰集の中でも、著名なもので、これらにもれたものを撰集したとある。

歌は、ひと節あるものとして撰んだものとみえて、はじめの、千浪同門 墨田川つつみの桜くれそめて霞になりぬ今戸いしはま 小林 歌城

の結句、

岩がねに友呼ぶ熊の声さえて吹雪にくもる 小笠原長儀

夷蝦の海づら 消えぬにぞ雪とは思ひはてぬとも散る花寂 清水 光房

し春の池水 待宵の衣にくゆらすそらだきも更けては胸のけぶりなりけり 岡部 秋子

山まども羽蟻たつ日となりにけり麓の花はいまか咲くらむ 瀬戸 久教

うなる子がさす手ゆたかにさかづきの巻絵の山もまづ霞みつつ 白石 長忠

朝庭の雀のこゑをしづめつつひと声たかくなるうぐひす 関 知雄

うちなびく岸の柳にはらはれてほたる乱る河づらの里 清水 謙光

唐だねのものなりながらさかゆくは木の芽の香をや神もめづらむ(茶) 堀野 義礼

これらは、理に勝ったものもあるが、新らしい趣向をこらしていると思われる。これらには光房のほかには聞えた歌人でない。こうした新しい趣向、大隈言道のあるものと通ずるものがある。これは、この中にある千浪のものを見ても、千浪の好尚ではないと思われる。

終末にある天野政徳の歌は、小林歌城の歌論に通ずるものがある。歌城は、歌は、経世のためや齊家修身のためのものではなく、囲碁や盈裁のたぐいと同じで、もとより遊びのものにすぎず武士が武を忘れても専心すべきものではないと云った。

古今百人一首

松平 慶永撰輯  
文久元(六六)写

- 1 池水に水際の桜散りしきて波の花こそ盛りなりけれ  
後白河院
- 2 我こそは新島守よ隠岐の海の荒き波風心して吹け  
後鳥羽院
- 3 大方に思ふゆゑかたちかへり治まらぬ世を心にぞ問ふ  
後醍醐天皇
- 4 わきて今日待つかひあれや松が枝の世々の契をかけて見せつつ  
後陽成院
- 5 唐土の鳥もすむべくくれ竹の直なる代こそ限り知られぬ  
後水尾院
- 6 めづらしく都に象の唐やまとすぎし野山はいく千里なる  
靈元院
- 7 敷島の大和錦に織りてこそ唐くれなるの色もはえあれ  
光格天皇
- 8 白妙の波にうつして玉河の里の名磨く垣の卯の花  
今上御製
- 9 立居にも杖を力の老が身は国安かれと祈るばかりぞ  
東照宮
- 10 万代の春に契りてあづさ弓やまと島根に花を見るかな  
台徳公
- 11 さりとは世をうみわたる海士小舟同じ思ひのしな変るとも  
大猷公
- 12 いとど猶深きまことの心あらば世々の栄えと神も守らむ  
常憲公
- 13 いろ変へぬときはの松の影そへて千代に八千代にすめる池水  
文昭公
- 14 蓮葉に風吹くことの露散りて夏を忘るるけふの諸人  
成烈公
- 15 山城の井出のわたりに時雨して水無川に波や立つらむ  
以仁親王
- 16 君が為世のため何かをしからむ捨てて甲斐ある我が身なりせば  
宗良親王
- 17 和歌の浦にいく年波や重ぬらむ立ちゐなれたる鶴の羽衣  
熾仁親王
- 18 万代を呼ばふ藐姑射の山松に常なき風を何やどしけむ  
本願寺門跡光沢
- 19 千年をもたたみ入れたる箱崎の松に花咲く折に逢はばや  
豊臣秀吉公
- 20 夏蔭の青葉の山の遅桜春をここにやとめて咲くらむ  
鷹司政道公
- 21 よろづ代も変らぬ色に国民のなびく姿や庭の呉竹  
近衛信尋公
- 22 敷島の大和言葉のすがたにも治まる国の風はしるしも  
近衛忠熙公
- 23 天が下常磐のかげになびかせて君は千代ませ宿の呉竹  
烏丸光広卿
- 24 吹きたゆむ跡より誘ふ風も憂し須磨の若木の花の散りがた  
冷泉為村卿
- 25 真帆に吹く恵みの風のたよりゆる寄辺まさしき和歌の浦松  
冷泉為久卿
- 26 難波江も霞み渡りて芦の屋の里に音せぬ春雨ぞ降る  
冷泉為理卿
- 27 限りあれば今日脱ぎ捨てつ藤衣果なきものは涙なりけり  
九条道信朝臣
- 28 豊かなる世々を重ねて墨田川広き流れの波もさわがず  
葉室為胤卿
- 29 池の名の広きをおのが心とや立ちも騒がで遊ぶ芦鴨  
久我建通卿
- 30 なかなかに高きは君が名なりけり我は麓の雪の下草  
芝山持豊卿
- 31 咲き満ちし盛り長閑けき花の枝に霞をしむる色鳥の声  
鷲尾隆純卿
- 32 近江のや瀬多の長橋ながらへて君が千歳を持ちぞ渡らん  
烏丸光政卿
- 33 海原やこころ浮き立つ浮島に隅なき富士を三保の松原  
尾張斎莊卿
- 34 あづさ弓春とも知らず大君の仮の宮居を忍ぶ我が身は  
水戸斎昭卿
- 35 きせ綿は我が着せてこそ咲きにけめ千歳は讓れ白菊の花  
千種有功卿
- 36 庭の面はまだかわかぬに夕立の空さりげなく澄める月かな  
源三位頼政卿
- 37 春来ぬと日を経て染むる青柳の糸くりかへし鶯の鳴く  
橋本実麗朝臣
- 38 掬ぶ手の袂にあかぬ涼しさは夏と岩間の水の月かけ  
綾小路有長卿
- 39 有明の月もあかしの浦風に波ばかりこそよると見えしか  
平忠盛朝臣
- 40 千早振神に祈りのかなへばやしろくも色の頭はれにけり  
平経政朝臣
- 41 立ちならぶかひこそなけれ山ざくら松に千歳のいろはならはで  
武田晴信朝臣
- 42 何事もかはりはてたる世の中を知らでや雪の白く降るらむ  
佐々成政朝臣

43 立ちなるる千代のみどりの色深き松のよはひ  
を君も経ぬらむ 井伊直政朝臣

44 露分けし跡とめてこそあこがれめ月なき草の  
野への通ひ路 源定信朝臣

45 青葉のみ数そふ山の遅ざくら花はしげみのう  
ちに隠れて 清池院

46 梓弓ひき返さじと思ふよりなき数にいる名ぞ  
とどむる 楠 正行朝臣

47 卯の花の垣穂の雪の浦曲をば鳴さてことわる  
山ほととぎす 野宮定祥卿

38 浪遠く晴れ渡る夜の月かけて松の数のみ天の  
橋立 三条西季知卿

49 神や知る春日の野辺の若葉にも君が千歳をか  
ねて摘むとは 飛鳥井雅久卿

50 真白斑の手馴の鷹を引きすてて駒うちいづる  
松の下道 三条実万卿

51 敷島の大和心を人とはば朝日にほふやまさ  
くら花 本居 宣長

52 我が君の命にかはる玉の緒は何いとひけむも  
ののふの道 鳥居 勝高

53 風渡る竹の枯葉をそのままに梢にとむるさざ  
がにの絲 伊藤 仁斎

54 一葉散る柳の糸の絶え間より影さへほそき秋  
の三日月 武藤 某

55 我が門の五本柳枝垂れて長き日飽かぬうぐひ  
すの鳴く 荻生 雙松

56 玉川や幾度水をむすびても手には影なき山吹  
の花 沢井 若木

57 大船のゆたに仰がんと和田の原清き月夜にか

りおろして 前田 夏蔭

58 天の下濡らさぬ袖もなかりけり大内山の峰の  
時雨に 香川 景樹

59 はるばると雲をわたして明けそむる浪間に白  
き天の橋立 井上 文雄

60 仰ぎ思ふ世の外なれや雲の上の御階の庭の三  
日月の影 読人不知

61 事となくただ大空に澄む月をおのがさまさま  
人の見るかな 楠 尚平

62 松ばかりひとり立つ野の夕嵐たまらぬ音も冬  
枯れにけり 岡部 東平

63 大空の月は心の鏡かも忍べぼうつるいにしへ  
の秋 渥美 友嵩

64 寝る蝶の花にむつれし夢の間にあはれ幾世の  
春は経にけり 妻木 陸叟

65 宿かさぬ人のつらさを情にておぼる月夜の花  
のした臥 蓮 月 尼

66 明日もまた朝疾く起きてつとめばや窓にうれ  
しき有明の月 釈 涌蓮

67 定めなき雲の身にしも村時雨ふりすてがたき  
美濃の山住 釈 覚巖

68 嬉しさは老を餅のます鏡くもらぬ御代に七十  
年の春 釈 祐可

69 黒かりし駒も月毛になりぞゆく下柴払ふ雪の  
岡越え 釈 東溟

70 老が身も今朝迎へてはいとけなきころに似  
たる千代の初春 釈 本 照

71 うき世には語らふ友もなければや出でても帰  
る山ほととぎす 釈 善寧

72 河島の芦間にひとり立ちおくれ忍び音に鳴く  
道の友鶴 釈 松堂

73 ささがにの雲間の月も心せよ山ほととぎす来  
べき宵なり よみ人しらず

74 山の端は重なる雲に明けかねて夏の夜長き五  
月雨の頃 よみ人しらず

75 花紅葉いろなき浦の苦屋にも波のよるよる月  
は澄みけり 妻木 敬斎

76 河上の根芹つむ子もころせよ花のかがみの  
影うつす頃 婉 尼

77 問はばやな野路の鈴虫それならでふりいづる  
ものは秋の村雨 楠 曙覽

78 青柳の木の下風に恵まれて池のころもやは  
らぎにけり 浅井 政昭

79 子日する野への小松の枝繁み君が八千代のか  
げとならん 有賀 方久

80 夏としも浪のよるよる雪とちる磯回の月のか  
げのすずしさ 中根 師資

81 花紅葉その色よりもほととぎす声の匂ひぞ忘  
れざりける 平本 良載

82 梅の実の匂ふ夕日の薄色もかひなく落ちて五  
月雨ぞ降る 本居 豊顕

83 巢籠の敦賀の磯の松風やともに千歳の声呼ば  
ふらむ 島田 正篤

84 月影は真砂の霜のふかき夜に夏をことわる山  
ほととぎす 楠 枝直

85 あぢきなく頭の雪とふりはてん黒髪山ものば  
り得ぬ身は 成島 道策

86 ひき結ぶ尾花が袖の手まくらに月も仮寝の野

辺の旅人

牧田 敬明

87桜花さきそめしより白雲もい行きはばかりるみ

よし野の山

加茂 季鷹

88敷島の道はたどれど賤が身に雲井の友は田鶴

ばかりなり

斎藤 昌磨

89一夜明けて霞の衣年とともに袂ゆたけくたて

る春かな

高井 八穂

90谷蔭はまだ白雪も消えなくに早くも山に立つ

霞かな

河井 孝廉

91降りしけば千代こもれりと見ゆるかな年くれ

竹にかかる白雪

安田 躬弦

92夜もすがら風に落葉の音ききて降らぬしぐれ

に袖ぬらしけり

高野 進

93皆人のもとの心はます鏡みがかばなどか曇り

はつべき

室 直清

94世の中は八重山吹の花心実なきことのみもて

はやしつづ

足代 弘訓

95松の火の木の間に見ゆる箱根山あけゆく峯ぞ

猶はるかなる

塙 保己一

96蟬小舟とませの山に風吹けば檜原にさはる雪

のしら波

久保田霽芳

97夜を寒み芦間の波も氷りつつ月冴えわたる難

波江の里

幸山 広居

98今朝ははや鶉の床も寒からむ霜おく野への深

草の里

琉球浦添按司朝意

99飛驒匠はめて造れる真木柱立てし心のうごか

ましやは

岡部 真淵

100今し世に引く人もなき陸奥のあだたら真弓張

らずもあらなん

平田 篤胤

○

〔解説〕後白河院から孝明天皇までの、古へ今の歌人の作を撰輯したもので、文久元年正之書之とあり。竹柏園旧蔵本。撰者松平慶永（一八二八—一八八〇）は越前福井藩主。松平春嶽公として世に識られた好字の藩主、武を興し文を尊び、賢名天下に鳴った人。元治二年には中根雪江を伴ひ、遊獵に托して橋曙覧の廬を訪ひ、のち城中に召し国典の進溝を求めたが、

花めきてしばしみゆるもすずな園田ぶせの庵にさけばなりけり

と詠んで曙覧は辞した。曙覧の歿した時（明治元年八月二十八日）春嶽は惜しんで

敷島の道のしるべは絶えにけり今より何をたづきにはせん

と詠み送った。佐佐木弘綱の宅を訪れて

位山高きも君が高き名にくらべてみれば麓なりけり

と詠んでおいて行ったという。春嶽は、藩主としての治世、維新に際しての行動に高邁なものがあつたが、明治政府は彼に勲章をおくつたほどであつたが、文学学問に理會が深かつた。それゆ

えに古今百人一首の撰のあることもうべなうことが出来る。皇室尊崇の念が強く、この百人一

首にも、後白河院、後鳥羽院、後醍醐天皇、後陽成院、後水尾院、靈元院、光格天皇、今上御

製（孝明天皇）を巻首におき、徳川歴代の將軍東照宮（家康）台徳公（秀忠）大猷公（家光）

常憲公（綱吉）文昭公（家宣）とおき、以仁親

王、宗良親王、熾仁親王を出し、本願寺門跡光沢をあげ、豊臣秀吉公を出した。更に朝廷の鷹司、近衛公を出して、その次に堂上歌学の家、烏丸光広、冷泉為村、為久、為理、久我建通、芝山持豊などについて、御三家のうち尾張齊莊、水戸齊昭を出し、千種有功をへだてて、源三位頼政、平忠盛、武田晴信、佐々成政、井伊直政、松平定信、楠正行など時代不同に武家を出した。更に直長、仁斎、徂来、夏蔭、景樹、文雄、東平、蓮月、涌蓮、曙覧、豊顕、枝直、季鷹、弘訓、保己一、真淵、篤胤など、江戸中期以後から当代現存の歌人学者をも採っている。注目すべきは、琉球浦添按司朝意の歌を入れてゐることである。

歌は国祝、憂国、忠烈のもの多く、寄物陳思の歌を主としている。叙景の歌はすくなく、恋の歌が一首もないところに、撰集の意途がある。文学にのみとらわれるところが強いのではなく、経世のこころを主として集められてゐる。歌はさすがに一すじに事がらのみを詠むものでなく、歌品もよく見定められている。後世この中から愛国百人一首に撰び入れられたものが多いのも当然であろう。

歌を主としたのではないけれども、橘枝直を入れて、千蔭、春海、などの巨星や、香川景樹門の人々や、当時盛行した鯉玉集の加納諸平も採っていない。然しこれは、必ずしも秀歌本意のものでなく、言いかえれば「愛国百人一首」幕末版ともいうことが出来る。

宮城百人一首

仙台藩日野資始輯  
慶応二(一九六)六月成

- 1 いづるより入る山の端はいづくぞと月にとは  
ばや武蔵野の原 中納言政宗卿
- 2 秋風のたつ唐舟に帆をあげて君かへりこむ日  
のもとをのそら 保春院殿
- 3 昔より稀なる年にここのつ余るも夢のうち  
にぞありける 伊達成実 安房
- 4 いねがての夜半の枕にほととぎす物思へとや  
行きかへり鳴く 伊達政景 雪齋
- 5 さえかへり雪は降れども時ぞとて軒ばの梅は  
花さきにけり 茂庭綱元 石見
- 6 思ひ出のなき身に積る年だにも暮るるは惜し  
き物にぞありける 内藤希顔 閑齋
- 7 わけ行かむ末の花野のさまざまに心くだけと  
おける露かも 大島良設 四郎左衛門
- 8 おろかなる心の底をわが君にくみしられなば  
山の井の水 法橋兼與 猪苗代
- 9 今日家をはなれにけりな宮城野の身も白露に  
おなじ世の中 青木忠五郎友重妻市女
- 10 うき人の心に秋の立ちしより我が手枕の野へ  
ぞ露けき 盲人連一 岩崎幸之丞善導父
- 11 君がよはひ幾千代かへむ限りなく広きところ  
の静にしあれば 遊佐好生 次郎左衛門
- 12 友としては昼はをじまのいその波夜は枕に松風  
のこゑ 瑞巖寺 雲居
- 13 都にてながめし月の影つれて独は越えぬしら  
河の関 右少将忠宗朝臣

異種百人一首十種

- 14 わけのぼる道は桜にうづもれて高嶺の月を誰  
にとはまし 伊達宗重 安芸
- 15 国たみもあまねくみちのおくなれば猶つし  
みをわすれずの山 左中将綱村朝臣
- 16 ももくさにまじりてわかぬ荻の葉をいかにも  
とめし秋の初風 遠藤玄信 式部
- 17 散りそめし桐の一葉にはるかなるもろこしま  
での秋ぞ知らるる 佐々定隆 豊前
- 18 咲く花を愛づるも蝶の夢の世とおもひすてて  
も春のあけぼの 葦名盛信 刑部
- 19 あたにちる花よりもろき身の程を知らず顔に  
て詠め暮しつ 自秀院尼 佐々定条祖母
- 20 たらちねの老いゆく末の思はれて猶をしまる  
る年のくれかな 侍従光宗朝臣
- 21 露の身のあるかなきかのおきどころそれにも  
風のさはる世の中 大仰寺 西山
- 22 すすたれし軒うちにはらひなには人葦火たく屋  
も春やまつらん 多ヶ谷友規 五郎太夫
- 23 なべて世のこのめもはるのいろ見せてかすむ  
梢に花ぞまたるる 田辺希文 喜右衛門
- 24 さきの世の親となるもの後のよの子となるも  
のも今の世のわれ 芦徳林 幸七郎
- 25 おそくとくさきちる花のいろ香にもまづおも  
はるる人の世の中 中嶋信秋 豊前
- 26 月かげかそれかあらぬか見るほどもかくれて  
くらき雲の上かな 柴田朝意 外記
- 27 身につもる老な忘れそはるは花秋はもみちも  
もろくちる世に 蜂屋可広 六左衛門
- 28 秋はまた花のしをりのみちかへてもみちをわ  
くるしがの山ごえ 熊谷直清 斎
- 29 はるさめに小田のなはしろ水こえてくるる汀  
にかはづなくなり 蜂屋可敬 又左衛門
- 30 雲にきえ雪に埋れて富士の嶺はいつをまこと  
のすがたとは見ん 岡本為成 彦十郎
- 31 あはれなり秋の野もせに見しいろもうつれば  
かはる霜のした草 富田紹実 吉岐
- 32 たのめこしちぎりも今は中絶えて思へば苦し  
ひとり寐の床 鈴木直行 弥左衛門
- 33 幾かへりしぐれてもなほ音羽山松の常盤のい  
ろぞかはらぬ 布施定安 備前
- 34 降る雪にそれとも見えうづもれて名のみと  
きはの松が浦島 首藤友平 弥兵衛
- 35 をしからぬ老のいのちはながらへて今年も暮  
れぬあはれ世の中 富塚隆義 右門
- 36 世の中の人のこころにくらぶればなほそこひ  
なき山の井の水 斎藤永保 六郎太夫
- 37 さびしさのいづくもおなし夕べとは思ひなき  
れぬふるさとの秋 黒沢俊栄 要人
- 38 かざりける色はうき世のかり衣今日ぬぎかへ  
つ墨染の袖 鑑松院尼 片倉小十郎村長母
- 39 ころなきあまも見ららし松島や小島が磯の  
波の月かけ 伊東祐栄 節翁
- 40 しきしのぶ賤が山田の稲むしろなれても露に  
いやは寝らるる 虎岩頼景 八弥
- 41 のちあれば今日こそわたれいつかはと心に  
かけし瀬田の長橋 萱場氏章 木工
- 42 この世にてなす事もなき老が身はくるる年だ  
にをしむともなき 武沢定守 含章軒

- 43 なぎかげも春の霞にたちそひてその名くちせ  
ぬあとあはれなり 狭川助克 喜多助
- 44 わするなよ身はもとあらの草の庵めぐみの露  
のかかるさかえを 三分一所景明 平介
- 45 かしこしなみちある御代は花鳥のいろ音もお  
のが時をたがへず 片倉村廉 小十郎
- 46 かならずと契るこよひもむなしくは又いつは  
りの数やつもらん 田村清真 函書
- 47 難波がたよしやあしへの風もふけあまの小舟  
はなみにまかせん 竜宝寺 実養
- 48 としをへてみどりさかく呉竹の嬉しきふし  
やよよにそふらむ 油井景雄 直人
- 49 まもれただ神のこころもふたしへにものふ  
の道しきしまの道 成田定守 市十郎
- 50 やすき世のめぐみに人の心さへやはらくけさ  
の春の長閑けさ 小原清元 庄右衛門
- 51 千代へぬる書もしるさずわたつ国のまもりの  
道は我ひとり見き 林友直 子平
- 52 山こゆるあらしのすゑのうき雲にひとつらな  
びく天つ雁がね 堀越親盈 兵馬
- 53 神無月時しもわかずしぐれしてふゆのはじめ  
をそらにするかな 葦名小太郎盛連母
- 54 あれはてて軒ばをつたふ音さへもむかしには  
似ぬ雨のふるさと 杼窪新兵衛広高母
- 55 かねてよりわかれをいそぐうき人の心知りて  
やとりの啼くらん 茂木義明 弘見
- 56 相おひのしげみに生ふる若松の八千代へぬべ  
きいろぞことなる 蜂屋氏増尾
- 57 みどり子のためには春のいそがれて老にはを  
しきとしの暮かな 白石三河頼重妻
- 58 いつはりのなき世と思ふこころよりちぎり初  
にし事ぞくやしき 名村甚太夫長格妻
- 59 君がためつかふる道しまことあらば老の寢覚  
もたのしからまし 佐藤三右衛門信也母
- 60 いかげせんよるの衣をかへしてもゆめにもう  
とき人のおもかげ 武田太郎常德母
- 61 あひ見ても猶ここのはの残る夜にわかれをつ  
ぐる鳥の音ぞうき 境野源助盛景妻
- 62 咲けかしな今はあるじとながむべし軒ばの梅  
のあらんかぎりは 紅蓮 尼
- 63 あきらけく名だかきそらに君が世の行すゑち  
ぎるもち月のかげ 平賀義雅 蔵人
- 64 ななそちに余るむかしをしのぶれば露はおか  
ねどぬるる袖かな 笠原貞康 兵記
- 65 これはまたまことの鳥のつぐる音に春もこえ  
来ぬあふ坂のせき 斎藤伊右衛門永昌母
- 66 さしのぼるまつよりうへの月はれて風もおと  
せぬ山のしづけさ 律師法橋蝶真
- 67 身はかかる憂きふしとても川たけの子の末を  
のみ思ひこそやれ 河田四兵衛安親母
- 68 いく秋かわれも来て見ん松島や千年かはらぬ  
月をちぎりに 左中将吉村朝臣
- 69 もろこしの鳥もすむてふ竹のよのながきため  
しを君ぞかぞへん 法橋了瑄 石井
- 70 天のとのあけてのどけきはるの日のひかりに  
ぬるむ山の井の水 法眼喜庵 高屋
- 71 かきのこす筆のすさみやしのばれん我もむか  
しの人となりなば 大槻清連 五郎助
- 72 わがために残しおきけん法の玉かずかず作る  
罪消えよとて 小川弥太郎盛誠母
- 73 塵の世のちりにそみたる身なりとも心はちり  
にそまらぬぞよき 志村実因 五城
- 74 はづかしやおろかなる身はことのはの花も匂  
はぬ春のあけぼの 大松沢実富 郡記
- 75 おきふしのわが友なれやくれ竹にねぐらしめ  
たる窓のうぐひす 菅野陳良 勇吾
- 76 うみやまの広きを見ても君がため民やすかれ  
と世をいはふなり 大内義門 縫殿
- 77 受けつぎし国のおきてのことわざに静こころ  
なく年の暮れぬる 左中将宗村朝臣
- 78 友舟もあらきなみちのさはりなくまもらせた  
まへもろもろの神 日野安聡 英馬
- 79 ほととぎす空になく音をうなる子のさながら  
うつすこゑもめづらし 大松沢実敏 丹宮
- 80 よそ目にはかすむと見えし春山にのぼりて見  
れば里ぞかすめる 只野伊賀行義妻 真葛
- 81 武士のいとまある世にながらへて三たびみそ  
ちの春を経にけり 木村成真 衛守
- 82 うゑおきしのきばの竹のよよをへてかはらぬ  
友と君やなれ見ん 錦織即休 義高
- 83 世の中の人のこころに鬼こめてあだちがはら  
は名のみなりけり 畑中盛雄 太冲
- 84 すむは天にごるは地のその中にめをのわざと  
ておのがさまさま 大槻清準 民治
- 85 たづのすむおなじ沢辺に打むれてともに千年  
のわかなをぞつむ 別所 玄李
- 86 とふ人はたえてあらしの柴の戸に馴れてもす

ごきふくろふのこゑ

岡本 友閑

87 ながれ出てうき名取川うもれ木のあらはれん  
とは思はざりしを 孝勝寺 日祐

88 山ふかくのがれこし身はいとふぞようき世に  
通ふ夢のただちも 但木養助行広母 直女

89 千代ふべき君がさかえのいろ見えてまつかけ  
ふかくすめる池水 徳子 君

90 たのまるるほどのなさは及ばねどかけてや  
見まし撫子のつゆ 涌谷玄祐妻栄子

91 雲霧は千里に消えてひとつらのかりがねたか  
し秋風の空 砂沢定栄 十郎左衛門

92 もえいづる草のみどりのうすくくふるあと  
見ゆる庭の春さめ 多川丹弥包妻 常女

93 山かぜに花はとまらでよしの川きのふの春の  
あとのしらなみ 平原澄 三左衛門

94 かならずとたのめし人はつれなくてちぎらぬ  
袖にありあけの月 鈴木親清 要治

95 のがれてもまた世の中の人なみにいそげばい  
そぐ年のくれかな 瑞鳳寺 百川

96 さく花のにほひもふかし夕づく日さすや入江  
にかげをうつして 松本成保 出雲

97 あはれなり霜をいたたく冬がれも身のほかな  
らぬ野辺のもも草 斎藤永図 衛守

98 明日も見るものとや人の帰らん夜の問も花  
はたのみなき世を 河田安親 四兵衛

99 あけ暮におもふもくるし国民とともにあそば  
む世をねがふ身は 左中将重村朝臣

100 さやけしな夏だにそれと見し月のまことの霜  
にみがくひかりは 左少将齐宗朝臣

異種百人一首十種

○

〔解説〕仙台文庫叢書第三輯「宮城百人一首」

渋紙表紙袋綴活版一冊。22.5cm×15.2cm「宮城百人一首遺稿」と合綴。日野資始輯、保田光則校正、橋本貞再校。明治二十七年十一月廿八日発行。発行兼印刷者作並清亮。この本を底本とした。はじめに「宮城百人一首序」あり。慶応

二年十月十五日、保田光則の署名がある。この百人一首の成立について、仙台侯が、文武の道を尊び、慶応二年三月の半に、日野資始に命じて「我が国の昔の人々の歌」を輯め撰ばしめ、

光則に校へ正さしめられたが、資始はあまねく人々に問い、家々の書を搜り求めてこれを六月の末に清書して「宮城百人一首」と名づけて奉った。君侯はこれを喜んで座右を放たない始末であった。人々も写しとつてもてはやした由を記している。

この書と合綴する「宮城百人一首遺稿」の奥に日野資始の跋がある。

今年弥生の半に藩内古人のうち有功の人をむねとして、諸道に秀でたる人、歌に名を得し人をも加へて彼の小倉百人一首になぞらへ輯め撰びて奉るべき由の仰言蒙りしより、及ぶべき業には侍らねども、白紙をとちて懐にし物知れる人々に尋ね問ひ、ここに見かしこに聞ける儘を、矢立の筆にまかせつつ記しつけ

侍りけるに、人は二百人にあまり、歌数は四百五十首にも及べり。されど猶、飛鳥の網にもれけむたぐひ、いくばくも有るべければ、

其の責め通れがたくなん。さはれやむべきことならねば、おそるおそるもやんごとなきみうへをばみけしきをうかがひ、その外のをば光則ぬしに問ひはかりて、人を定め歌を撰び宮城百人一首と名づけて奉りしは、水無月の末なりけり。さてその残れる歌、また洩れたる人々の歌をみるに、沖つ白玉光きよく、蟹の拾小舟すてがたければ、更に斯う清書して家に秘めおくこととはなしぬ。もとより歌を撰べるにもあらず、時代の新古をわかつたず、四季のついでをも定め侍らねば反古のままを清書したるものなれば也。慶応二年水無月。

これによって、成立に至る苦心と、日野資始の誠実さがうかがわれる。「遺稿」の奥には、仙台文庫叢書の編者作並清亮の後記と、日野資始略履歴がかかげてある。即ち、仙台藩士曾根小兵衛継述の第三子、日野今朝治資富の養子、定供右筆郡方横目奉行頭立物書小納戸役等歴事。明治三年四月十一日歿。歳五十、資性沈毅寡言、保田光則に従い歌学を溝じ、又錦織俊彦に就き俳諧をよくし千里台天有と号したという。

仙台藩主及藩士、さらにその関係の人々の歌を輯めた、中に「海国兵談」の著を以て幕府の忌避にふれた林子平の歌(51)のあるものも珍しい。子平の歌は「遺稿」には更に二首ある。

月と日のおそれみなくば折々は人目の関もこゆべきものを  
求めねばとはぬを人の情にてこころしづけ  
き柴のかくれが

大光明治新百人一首

小笠原美治編纂  
明治三年二月刊

- 1 世治まり民安かれといのるこそわが身につき  
ぬねがひなりけれ 後醍醐天皇
- 2 うばたまの夜すがら冬の寒きにもつれて思ふ  
は国たみのこと 孝明天皇
- 3 うちとけて雪も氷もなかりけりまだ春あさき  
日数とおもふに 二位 局
- 4 国のためこころ尽して高山のいさほもなしに  
はてしあはれさ 今上天皇
- 5 日の御旗たかくかかげて国民のあふぐや年の  
光りなるらむ 今上皇后
- 6 山姫の手染めのつゆの玉かづらかけていろそ  
ふ峯のみみぢは 二品熾仁親王
- 7 千とせをもなるきの松の深みどり色こそまさ  
れ君が代のはる 三条太政大臣
- 8 あら玉のとしたちかへる大空に田鶴がねたか  
く千代よばふなり 岩倉具視公
- 9 一つの世の子の日にもれてかくまでに松の老  
木のとしや経ぬらむ 源 烈 公
- 10 松のあらしいは井の清水とりどりに宿てふ宿  
は夕すずみせり 島津久光公
- 11 もみち葉のいろを染めずは山ざとはいかにさ  
びしき時雨なるらむ 和 宮
- 12 怠らずゆかば千里の外も見む牛のあゆみのよ  
し遅くとも 大将軍家康
- 13 とても世にながらふべくもあらぬ身の飯のち  
ぎりをいかで結ばむ 贈従三位正行

- 14 さどの海人のしほなれ衣しのべとてからき別  
れのかたみにぞ見る 文 貞 公
- 15 若みどりさすがに千代のおいさきもこもる二  
葉の松のいろかな 源 定信(松平)
- 16 ならべても我が身にしらぬならひとて夢かと  
ぞ思ふ新まぐらかな 重雅親王
- 17 我が君の千代をおきてはあら玉の年のはじめ  
に何を祝はむ 西三条季知卿
- 18 あふがばや星のはやしも我が君の八百万代の  
かずにかぞへて 荷田東麻呂
- 19 秋とだにたのまぬ春のゆめの間に交野の花は  
小野の夕ぐれ 契沖阿闍梨
- 20 いろも香も久しくにほへうつろはで八重かさ  
なれるしら菊の花 従二位慶永公(春嶽)
- 21 渡らじなせみの小川の浅くとも老の波そふ影  
もはづかし 石川 丈山
- 22 水鶏なくきしの真孤の水がくれて日かずふる  
江の五月雨の頃 従二位宗城公
- 23 我が袖の涕にやどるかげとだに知らで雲井の  
月やすむらむ 源義貞朝臣(新田)
- 24 はつ尾花むすびそめける夕露に秋てふ風の吹  
かずもあらなん 賀茂 真淵
- 25 ゆるさめや猶こりずまにかよふとも関吹きこ  
ゆる風ならぬ身は 元政法師
- 26 折々に遊ぶいとまはある人のいとまなしとて  
書よまぬかな 平 宣長(本居)
- 27 見おろせばしもつ千里のくまもなしふりぬる  
書や高根なるらむ 橘 千蔭(加藤)
- 28 千代のはるかけて霞をくみてみむつらなる枝

- 29 花のさかづき 贈大納言光圀(徳川)
- 30 ふるさとに今宵ばかりの命ともしらでや人の  
われをまつらむ 藤原 武時(菊池)
- 31 いひそめてつれなからばとさりげなくつつむ  
思ひぞいとどくるしき 小沢 芦庵
- 32 千々にさく言葉のはなもすなほなる心ぞもと  
の根ざしなるべき 伴 高蹊
- 33 高御座とばかり掲げて櫃原の宮のむかしもし  
るき春かな 後村上天皇
- 34 つくづくと思ひくらしして入相の鐘をきくにも  
君ぞ恋しき 八歳の宮
- 35 まれ人を花もまちえてよろこびの色をそへつ  
つ咲きにほふらむ 椎中納言綱条
- 36 かたるべき友もまれなる老が身にひとりむか  
しを猶しのぶかな 頓阿法師
- 37 さくら木にうつせば唐の言の葉もやまと心の  
花にぞありける 八田 知紀
- 38 とどまらぬ秋の行方にしたふらむはるかにな  
りぬさを鹿のこゑ 高崎 正風
- 39 かぎりなき遠きあづまに隅田川たえぬ流れを  
いつまでか汲む 九 重(西田楼)
- 40 妹背山ながるる川のうす氷とけてぞ妹と袖は  
ぬれける 勝 山(山本楼)
- 41 九重のみそののたづは大君のめぐみに馴れて  
千代を経ぬべし 一品熾仁親王
- 42 ふると見ば積らぬさきにはらへただ風吹く松  
に雪折れはなし 中江原(藤樹)
- 43 一葉まづはかなく落つる桐の葉に秋たつ今朝  
の風をしるかな 従二位慶徳公



43 久方の雲の上なる庭のおもになれてゆたけき  
あしたづの声 東伏見宮(邦家親王)

44 久方の雲居のにはにすむ霧の千代呼ぶ声の高  
くもあるかな 有栖川宮妃

45 久方の雲井の庭にすみ馴れて君が千代呼ぶあ  
したづのこゑ 東伏見宮妃

46 かぎりなき春をもつまん朝日かげさし出の磯  
の若菜のみかは 井伊直弼朝臣

47 かぎりあれば吹かねど花は散るものをこころ  
みじかき春の山風 藤原 氏郷

48 名にしおふ田子のうら波たちかへりまたも来  
てみむ富士の白雪 豊 太 閤

49 集めてはくにの光りとなりやせんわがまど照  
らす夜半のほたるは 後龜山天皇

50 さみだれの晴れしなごりの雲まよりもれて涼  
しき月のかげかな 島津斉彬朝臣

51 ふるさとはなれぬあらしに道たえて旅寝にか  
かる夢の浮はし 兼好法師

52 初霜の岡の萱原いつのまにあき見し露のむす  
びかふらむ 尊円法親王

53 唐土の虎伏す野辺に吹く風の目にみぬところ  
おそろしの世や 香川 景樹

54 かくれ家の一もと小萩花さけば露をよすがら  
月やとひくる 加茂 季鷹

55 たてまつる龜の尾山の早蕨は千代をかぞふる  
手に似たるかな 涌蓮法師

56 玉ぼこの道はあれでもすすみゆくやまと心の  
駒はたゆまじ 烈公侍女とき子

57 逢坂や外山のもみぢさそひ来てあらし色こき

異種百人一首十種

関の杉むら 中將齊裕朝臣(蜂須賀)

58 すきかへす水のうたかた哀れにもくるる門田  
になく蛙かな 細川齊護朝臣

59 惜しむ日もやや呉竹のともし火はよしの玉づ  
さ猶てらせとや 豊臣勝俊(木下長嘯子)

60 なほざりに書きなすさめそ鳥の跡人のこころ  
も見ゆといふなり 平 春海(村田)

61 明けやすきうらみもらじ我が袖にすずしさの  
こせ夏の夜の月 重孝(法橋紹益)

62 このねぬる朝妻船のあさからぬ契りをたれに  
またかはすらむ 通勝卿(烏丸)

63 初雁の稲葉におつる声はあれどうゑし田の面  
になく時鳥 北村 季吟

64 こころのみおもひこがして文机のふみを見る  
さへもの憂かりける 贈従二位宣嘉卿

65 真金ふく吉備の歌舞ひ九重にめされて今日や  
さびの歌舞ひ 従四位美静朝臣(福羽)

66 山がらのからきもたへてすずかな世はなら  
はしの夕ぐれのやど 近藤 芳樹

67 雪ならば梢にとめてあすやみむ夜のあられの  
音にのみして 梶 子(祇園)

68 住みすつる山を浮世の人とはばあらしや庭の  
松にこたへむ 万里小路藤房卿

69 帰るべき時しなればこれやこのゆくを限り  
の逢坂の関 中納言具行卿

70 知らせばやしほやく浦の煙りだにおもはぬ風  
になびくならひを 一宮中務卿(尊良)親王

71 立ちぬべきうき名をかねて思はずは風にけぶ  
りのなびかざらめや 今出川御息所

72 おもひやれちりのみつもる四つの紘にはらひ  
もあへずかかるとは 中 宮(禧子)

73 思ひきやわが敷島の道ならでうき世の事をと  
はるべしとは 二条中將為明卿

74 古へもかかるとめしを菊川のおなじ流れに身  
をや沈めむ 俊基朝臣(日野)

75 玉しきのみ階ゆたかに雛鶴の鳴き行くすゑの  
千代やかぞへむ 徳大寺宮内卿(実則)

76 すべて世のときめく花にくらぶれば菊はさか  
りも静かなりけり 大久保一翁

77 のがれかね世にふりはてし老の身はかくれ住  
むべき山なしの本 戸田 茂睡

78 雲はみなをさまる峯のあけぼのに春のひかり  
と立つ霞かな 近衛忠熙公

79 山々はまだ夜をのこす雲の上にひとり明けゆ  
く雪の富士の根 塙檢校(保己一)

80 代々を経てながめし人の数にまたわれをも許  
せ秋の夜の月 伊藤維貞(仁齋)

81 雨はれし名残の露をよすがにてすずしくやど  
る夏の夜の月 津軽 順承

82 千たび見て千たびめづらし雲風のすがたさだ  
めぬ富士の芝山 千種有功卿

83 やま風に雪げの雲を吹きとちてけむり短かき  
小野の炭竈 小野寺秀和

84 つぬさはふ岩間の水のいはずとも湛へてしる  
き千代のいろかな 副島種臣朝臣

85 つたへ来て春はむかしにかはらねど人の心の  
昔にも似ぬ 熊沢伯継(蕃山)

86 いにしへはかからざりしをちる花の身にしむ

までに老いにけるかな 勝義邦(海舟)

87 片糸のよりだにあはぬ濡衣をたがいつはりて

縫ひてきせむ

足代 弘訓

88 雨おもるささめの簑に風たちてゆふぐれいそ

ぐ野路のたび人

清水 浜臣

89 なく雁の声もはるかにへだたりてつばさきえ

ゆく秋霧のそら

正子(矢部氏)

90 花の春紅葉の秋のいろいろは世の常なきを見

するなりけり

富士谷成章

91 つらかりし寢覚の音も忘られてあくれば拾ふ

庭のささ栗

望月兼友(長孝)

92 里遠み通ふ心のたびねにも夢やはよとす道の

山風

牡丹花肖伯

93 われといへばるな野のすゑのあり馬背いかな

る人の笠にゆふらむ

下河辺長流

94 あれわたる籬の真葛かぜ吹けばうらぶれての

み音の聞こゆる

小野 古道

95 植ゑおきしむかしやかねて契りけむけふのみ

ゆきを松風のこゑ

前大僧正頼意

96 山の端になほ入りやらでつれなくもうき世の

中にあり明けの月

祥子内親王

97 まちえてもただ一筆はみづぐきの岡の葛葉は

うらみ添ふらむ

後柏原院

98 長かれとなに思ひけむ世の中の憂きを見する

は命なりけり

万里小路宜房卿

99 たび衣かけてもしらぬ手枕の夢のまよひにい

く夜経ぬらむ

三条西実隆

100 くもりなき天つ日継をみづがきのうゑて久し

き身をいのるかな

後奈良院

○

なん。

〔解説〕木版檀紙表紙袋綴、235×165 百五

四丁の大冊。題簽に「民間至宝大全明治新百人

一首、鬘頭百科漫録、附刊諸般類聚、小笠原美

治編纂田島象二校訂全」とある。「各勲章の図」

から「神代三陵図解」に至る百十八項を集録す

る。「尊王三十六家撰」「懐紙并に短冊書式」「異

名部類」「詩作平仄図」「明治略史」「啓蒙万

象図絵字類」から「手紙文範店受状」に至るま

で万般の重宝記がある。「新百人一首」は五九

丁以下一〇一丁まで。五八丁裏に「明治新百人

一首はし書き」あり

千早ふる神の御代より八つの緒の今年に至る

まで飛鳥川の瀬々は移れど変らぬものは我が

敷島の道にして玉敷の都はさらにもいはず、

天離る鄙の隈々、谷くぐのさ渡る極み推広こ

り花の朝月の夕べ物につけ事にふれ、歌よむ

ならはしとはなりぬ。されば定家の朝臣のも

のし給ひし小倉の百首は、世々に伝へ来し乙

女子の歌詠む階梯となりぬ。されども今の大

御代となりてより人皆古きを捨てて新しきに

移り乙女子さへおさおさまばゆきを好むふり

とはなりけらし。故ここに南朝より明治の大

御代までの種々の歌どもを書いあつめ、一卷

となし、学びの窓に乙女子がもてあそぶ料と

までに桜木に花さかせぬ。あはれ神代の大御

手振のいよいよ真さかりに天地のむた常しへ

に此刻板の石となるまでゆめ衰へなせそと寿

きて端書する者は、弘会社のあるじ源美治に

本文出像と歌、各一面に一人。側に別出略伝、

上欄には明治略史、元年より十三年八月まで。

「布告日用早引」漢字の語彙の訓みと解、いろ

は引、「日本名山」をかかげた。人々は序の通

り南朝以下の作者、女性今上皇后以下十人。

終に、後のはし書き(跋)あり。

…：我が弘令舎のあるじ源の美治の大人二つ

きの暇ま、中つ世より筆とりそめ、今の御

代に至る其間のたけき功ある人あるはかしの

実のぬけいでたる人々の歌ども撰り集め、明

治新百人一首でふ書をものし玉ひ、巻なりて

我に正せとなん請ひ玉ひぬ。故うけて読かか

ふるにたけく雄々しきと、みやびやかなどう

るはしきとおのおのも…：その手振りは小

倉山の荘にはりたりと云ふなる定家の朝臣の

ものしたまへる百人一首にたくらべておさお

さ劣らぬ歌どもさはなりける故…：

と田島象二(多治比真人象市)が誌している。

そのあとに「贈正一位楠正成公真像」(広厳宝

勝禅寺安置)と題して真像を出し、上に懐紙、

詠三首和歌 楠木兵衛正成

ちる花を日数としたふかひもなきなみだたと

もにくるる春かな(暮春)

以下二首を出す。この本一五四丁中、約三分の

一なる五十二丁が新百人一首の占める分量であ

る。刊記に、維時明治十三年十月廿三日版權免

許、編纂出版人岡山県士族小笠原美治、発売本

処弘令社出版局(神田五軒町十八)とある。

新撰百人一首

泊翁西村茂樹撰輯  
明治一六年九月刊

- 1 秋の田のかりほのいはのとまをあらみわが衣手は露にぬれつつ 天智天皇
- 2 春すぎて夏来たるらしろたへの衣ほしたり 天のかぐ山 持統天皇
- 3 ほのぼのとあかしのうらの朝霧に島がくれゆく舟をしぞ思ふ 柿本 人麿
- 4 田子の浦ゆうち出で見れば真白にぞふじの高ねに雪はふりける 山部 赤人
- 5 奥山に紅葉ふみわけなく鹿の声きくときぞ秋はかなしき 猿丸 大夫
- 6 かささぎのわたせるはしにおく霜の白きを見れば夜ぞ更けにける 中納言家持
- 7 あまのはらふりさけみれば春日なる三笠の山にいでし月かも 安倍仲麻呂
- 8 わが庵はみやこのたつみしかぞすむ世をうじやまとひとはいふなり 喜撰法師
- 9 花のいはうつりにけりないたづらにわが身よにふるながめせしまに 小野 小町
- 10 これやこのゆくもかへるもわかれつつしるもしらぬもあふ坂の関 蟬 丸
- 11 和田の原八十島かけてこぎいてぬと人にはつげよあまのつり舟 参議 篁
- 12 たらちねはかかれとてこそぬばたまのわがくろかみをなでずやありけむ 僧正 遍昭
- 13 君がため春の野にいでて若菜つむわが衣手に雪はふりつつ 光孝天皇

異種百人一首十種

- 14 立ちわかれないなばの山の峰に生ふるまつとし 中納言行平
- 15 ちはやぶる神代もきかず立田川からくれなるにみづくくるとは 在原業平朝臣
- 16 秋来ぬとめにはさやかに見えねども風のおとにぞおどろかれぬる 藤原敏行朝臣
- 17 年をへて花のかがみとなる水はちりかかるをやくもるといふらむ 伊 勢
- 18 見わたせば柳さくらをこきまぜて都ぞ春のにしきなりける 素性法師
- 19 吹くからに秋のくさ木のしをるればうへ山風をあらしといふらむ 文屋 康秀
- 20 月見ればちちにもものこそかなしけれわが身ひとつの秋にはあらねど 大江 千里
- 21 このたびはぬさもとりあへず手向山もみちのにしき神のまにまに 菅 家
- 22 かがみ山いざたちより見てゆかむとし経ぬる身は老いやしぬると 大伴 黒主
- 23 小倉山みねのもみち葉心あらばいまひとたびのみゆきまたなん 貞 信 公
- 24 人のおやの心はやみにあらねども子を思ふ道にまどひぬるかな 中納言兼輔
- 25 山里は冬ぞさびしさまさりけるひとめも草もかれぬとおもへば 源宗千朝臣
- 26 心あてに折らはやをらむ初霜のおきまどはせらしら菊のはな 几河内躬恒
- 27 春立つといふばかりにやみよし野の山もかすみてけさはみゆらむ 壬生 忠岑
- 28 あさばらけ在明の月とみるまでによし野の里にふれるしら雪 坂上 是則
- 29 山川に風のかけたるしがらみは流れもあへぬもみちなりけり 春道 列樹
- 30 久方の光のどけき春の日にしづこころなく花のちるらむ 紀 友 則
- 31 誰をかも知る人にせん高砂の松もむかしの友ならなくに 藤原 興風
- 32 人はいさこころもしらずふるさとは花ぞむかしの香にほひける 紀 貫之
- 33 夏の夜はまだ宵ながら明けぬるをくものいづこに月やどるらむ 清原深養父
- 34 白露に風の吹きしく秋の野はつらぬきとめぬ玉ぞちりける 文屋 朝康
- 35 谷風にとくる氷のひまごとにうちいづる波や春の初花 源 當 純
- 36 あらたまの年の終りになるごとに雪もわが身もふりまさりつつ 在原 元方
- 37 かぞふれば我が身につもるとし月を送りむかふとなにいそぐらむ 平 兼 盛
- 38 やかざとも草はもえなん春日野をただはるのひにまかせたらなん 壬生 忠見
- 39 わが宿の千代の川竹ふし遠みさもゆくすゑのはるかなるかな 清原 元輔
- 40 八重むぐらしげれるやどのさびしき人こそ見えね秋は来にけり 惠慶法師
- 41 有明の月のひかりをまつほどにわがよのいたくふけにけるかな 藤原 仲文
- 42 あしの葉にかくれてすみし津の国のこやもあらはに冬は来にけり 源 重之

43 ちとせまでかぎれる松もけふよりは君にひか

れてよろづ代やへむ 大中臣能宣朝臣

44 ころもでの山井の水にかけみえしなほそのか

みの春ぞこひしき 藤原実方朝臣

45 おもひやる心ばかりはさはらじをなにへだつ

らむみねのしらくも 橘 直幹

46 ことのねに峰の松風かよふらしいづれの緒よ

りしらべそめけむ 斎宮 女御

47 滝の音はたえて久しくなりぬれど名こそ流れ

てなほ聞えけれ 大納言公任

48 水の面にてる月なみをかそふればこよひぞ秋

のなかなりける 源 順

49 くれぬめりいく夜をかくてすきぬらむ入相の

かねのつくづくとして 和泉 式部

50 めぐりあひて見しやそれともわかぬまに雲が

くれにし夜半の月かな 紫 式 部

51 はるかなるもろこしまでもゆくものは秋のね

ぞめめのこころなりけり 大式 三位

52 かへるかり雲井はるかになりぬなりまたこむ

秋もとほしとおもふな 赤染衛門

53 大江山いく野の道のとほければまだふみもみ

すあまのはし立 小式部内侍

54 いにしへの奈良の都の八重ざくらけふ九重に

にほひぬるかな 伊勢 大輔

55 のがるれど同じうき世のなかなればいづくも

あかずすみよしの里 清少納言

56 あさばらけ宇治の川霧たえだえにあらはれわ

たる瀬々のあじろ木 権中納言定頼

57 ことのはにつけてもなとかとはざらむ蓬のや

どもわかぬあらしを 相 摸

58 もろともにあはれと思へ山ざくら花よりほか

にしる人もなし 大僧正行尊

59 浅からぬ心ぞみゆる音羽川せきいれし水の流

れならねど 周防 内侍

60 心にもあらでうき世にながらへば恋しがるべ

き夜半の月かな 三条 院

61 あらし吹く三室の山のもみち葉はたつたの川

のにしきなりけり 能因法師

62 さびしさにやどを立ちいでてながむればいづ

こもおなじ秋の夕ぐれ 良暹法師

63 夕されば門田の稲葉おとづれてあしのまろや

に秋風ぞ吹く 大納言経信

64 高砂の尾の上のさくら咲きにけり外山のかす

みたたずもあらなん 前中納言匡房

65 うづら鳴く真野の入江の浜風に尾花なみよる

秋の夕ぐれ 源俊頼朝臣

66 みよし野の山井のつららむすべばや花のした

紐おそくとくらむ 藤原 基俊

67 和田の原こぎ出でてみれば久方のくもるにま

がふ沖つ白波 法隆寺入道前関白太政大臣

68 大井川古き流れをたづね来てあらしの山の紅

葉をぞ見る 白 河 院

69 花は根に鳥は古巢にかへるなり春のとまりを

知る人ぞなき 崇 徳 院

70 淡路島かよふ千鳥のなく声にいく夜ねぞめぬ

須磨の関守 源 兼 昌

71 ほととぎすなきつるかたをながむればただあ

りあけの月ぞのこれる 後徳大寺左大臣

72 世の中よ道こそなけれ思ひ入る山の奥にも鹿

ぞ鳴くなる 皇太后宮大夫俊成

73 ながらへばまたこの頃やしのばれむうしとみ

しよぞ今は恋しき 藤原清輔朝臣

74 ひさぎ生ふる片山かげにしのびつつふぎける

ものを秋の初風 俊恵法師

75 五月雨はとまの雫にそでぬれてあなしほとけ

のなみのうきねや 源 仲 正

76 いづくにも生まれすはただすまであらむ柴の

いはりのしばしなる世に 西行法師

77 むら雨のつゆもまだひぬ榎の葉にきりたちの

ぼる秋の夕ぐれ 寂蓮法師

78 波まより見えし景色ぞかはりぬる雪ふりにけ

り松がうら島 法橋 顕昭

79 都にはまだ青葉にて見しかどもみぢ散りしく

白河の関 従三位頼政

80 有明の月もあかしの浦風になみばかりこそよ

ると見えしか 平忠盛朝臣

81 さざ波や志賀のみやこはあれにしをむかしな

がらの山ざくらかな 平 忠 度

82 山ふかみ春ともしらぬ松の戸にたえだえかか

る雪の玉水 式子内親王

83 春風の霞ふぎしくたえまより乱れてなびく青

柳のいと 殷富門院大輔

84 きりぎりす啼くや霜夜のさむしろに衣片敷き

独かも寝む 後京極摂政前太政大臣

85 ころあるをじまのあまの袂かな月やどれと

はぬれぬものから 宮 内 卿

86 をりこそあれながめにかかるうき雲の袖もひ

とつにうちしぐれつつ

二条院讃岐

87世の中はつねにもがもななぎさごうあまの小

舟の綱手かなしも

鎌倉右大臣

88み吉野の山の秋風さよふけてふるさと寒くこ

ろもうつなり

参議 雅保

89おほけなくうき世の民におほふかなわがたつ

袖にすみぞめの袖

前大僧正慈円

90花さそふあらしの庭の雪ならでふりゆくもの

はわが身なりけり 入道前太政大臣(公実)

91駒とめて袖うちらはらふかげもなしさ野のわた

りの雪の夕ぐれ

権中納言定家

92風そよぐならの小川のゆふぐれはみそぎぞ夏

のしるしなりける

正三位家隆

93さらぬだにおもきがうへのさよごもわがつ

まならぬつまなかさねそ

寂然法師

94つくづくと春のながめのさびしきはしのぶに

つたふ軒の玉水

大僧正行慶

95難波がたかすまぬ波もかすみけりうつるもく

もるおぼろ月夜に

源具親朝臣

96いはがねの床にあらしを片しきてひとりや寝

なむ小夜の中山

大花卿有家

97風かよふねざめの袖の花の香にかをるまくら

の春の夜のゆめ

俊成卿女

98石川やせみの小川の清ければ月も流れをたづ

ねてぞすむ

鴨 長明

99あさひさすみもすそ川の春の空のどかなるべ

き世のけしきかな

後鳥羽院

100玉島や川瀬の波の音はしてかすみにかぶ春

の月かげ

順徳院

異種百人一首十種

○

〔解説〕文打出紙表紙袋綴、木版一冊。大冊。

西村茂樹纂輯、西阪成一略解、白石千別校閱。

版權免許明治十六年九月廿六日中外堂蔵梓。巻

頭「徳感人風動物」の題字有栖川宮熾仁親王。

漢文序南摩綱紀、更に小中村清矩の序、つづいて緒言あり。

此編は、泊翁西村先生の撰定せられし百人歌

集なり。先生文部省に官し深く心を教育に用

ゐ、著されし教化書若干あり。世の普く知る

所なり。而して其緒余又此編あり。蓋し従来

上下一般に児女子をして暗誦せしめし小倉百

人一首は、恋歌多くして頗る猥褻に流れ、風

化を害すること尠からざるを以て、之に代ふ

るに文雅にして教育の補助となるべきものを

以てせられたるなり。

此編は、小倉百人一首を本とせしものゆゑに

純なる者は凡て旧に従ひ、猥褻に渉る者は其

人を存して代ふるに他の歌を以てし、或は其

人其歌俱に艾除して新に撰録せし者もあり。

各首に其大意と小伝とを附録したるは、児女

子をして其歌と其人との概略を了解せしめんと

欲するなり。予固より浅学にして歌道を識

らず、故に古今諸家の解説を摘採すと雖も、

粗漏訛謬の責を通る能はず、願くは大方の諸

君子質正あらんことを。

此編の画図は友人平山祐之氏貯蔵する処の安

永年間勝川春章の彩色画本に拠る。其衣冠服

章等舛錯差謬の疑あるものは、有識家の是正

を請ひて之を改むと雖も、猶遺脱するもの多

からん。是亦質正を賜はは幸甚し。

歌を書するは友人多田親愛氏なり、同氏は和

様の筆道を嗜み、最も仮名を善くす。此編は

世人の読み易きを主とするが故に、同氏得意

の風致を頭はさず、雅俗を折衷して揮毫せし

ものなり。明治十六年十一月、西阪成一誌。

緒言の通りに本文は各丁表に出像と歌、裏に解

と小伝をかかげた。跋あり。

池の蓮霜枯れわたる神奈月の初めつかた、日

頃心しりの友なる西阪成一ぬし、わが借翠居

をとぶらはれける時、此新撰百人一首見よと

て示さるるを、窓のもとにひもときたればか

をりめでたきいろいろの花ひらのたくひ爰に

咲出たらむやうにて、打むかふこころもおの

づから清らになりぬ。かくてぞ此百人一首幼

童らが暗誦してしき島の道の山口ふみわくる

しるべともなり、はた世教有益の冊子とも成

ぬべし。あはれいみじくも撰まれつるかな、

世に人の子の父母たるもの一大蓮花の清香は

物かは茂樹大人のいさをしをめで尊までやは

あるべき

君のしるべなからましかば小ぐら山くらき

坂路にふみやまよはむ

明治十六年霜月の廿日ばかり、此冊子見終り

て返し参らす時蓮池庵のあるじ白石千別巻の

しりへにしるす。

とある。屢行われる「小倉百人一首」の改修版

歴代秀吟百首

川田順撰並註釈  
昭一三(二八四)成

1 吾が里に大雪ふれり大原の古りにし郷にふら  
まくは後(万葉集) 天武天皇

2 君待つと吾が恋ひをればわが屋戸のすだれ動  
かし秋の風吹く(万葉集) 額田王

3 百伝ふ磐余の池に鳴く鴨を今日のみ見てや雲  
隠りなん(万葉集) 大津皇子

4 天さがる夷の長道ゆ恋ひくれば明石の門より  
倭島みゆ(万葉集) 柿本人麻呂

5 いづくにか船泊すらむ安礼の崎榜き回みゆき  
し棚なし小舟(万葉集) 高市黒人

6 くるしくも降りくる雨か神の埼狭野のわたり  
に家もあらなくに(万葉集) 長 奥麻呂

7 すべもなく苦しくあれば出で走り去なと思  
へど児等にさやりぬ(万葉集) 山上 憶良

8 ぬばたまの夜の更けぬれば久木生ふる清き河  
原に千鳥しば鳴く(万葉集) 山部 赤人

9 大丈夫の弓末ふりおこし射つる矢を後見む人  
は語り継ぐがね(万葉集) 笠 金村

10 この世にし楽しくあらば来む世には虫に鳥に  
も吾はなりなむ(万葉集) 大伴 旅人

11 斯くしつづ遊び飲みこそ草木すら秋は咲きつ  
つ秋は散りぬる(万葉集) 大伴坂上郎女

12 神風の伊勢の浜荻折りふせて旅宿やすらむあ  
らき浜辺に(万葉集) 碁檀越妻

13 吉野なる夏実の川の川淀に鴨ぞ鳴くなる山か  
げにして(万葉集) 湯原王

14 千万の軍なりとも言葉げせずとりて来ぬべき  
をのことぞ思ふ(万葉集) 高橋虫麻呂

15 御民われ生けるしるしあり天地の榮ゆる時に  
あへらく思へば(万葉集) 海犬養岡麻呂

16 青丹よし奈良の都は咲く花の匂ふがごとく今  
さかりなり(万葉集) 小野 老

17 かしこみと告らずありしをみ越路のたむけに  
立ちて妹が名のりつ(万葉集) 中臣 宅守

18 帰りける人きたれりといひしかばほとほと死  
にき君かと思ひて(万葉集) 狭野茅上娘

19 足引の荒山中に送りおきてかへらふ見れば心  
苦しも(万葉集) 田辺福麻呂

20 立山の雪しくらしもはひ槻の河のわたり瀬あ  
ぶみつかすも(万葉集) 大伴 家持

21 鶯の鳴く久良谷にうちはめて焼けは死ぬとも  
君をし待たむ(万葉集) 平群 女郎

22 大君のみことかしこみ磯に触り海原わたる父  
母をおきて(万葉集) 文部造人麻呂

23 天の原ふりさけ見れば春日なる三笠の山にい  
でし月かも(古今集) 安倍仲麻呂

24 阿耨多羅三藐三菩提の仏たちわが立つ所に冥  
加あらせたまへ(新古今集) 伝教大師

25 忘れては夢かと思ふおもひきや雪踏みわけ  
て君を見むとは(古今集) 在原 業平

26 折りつればたぶさにけがる立てながら三世の  
仏に花たてまつる(後撰集) 僧正 遍昭

27 うたたねに恋しき人を見てしより夢てふもの  
は頼みそめてき(古今集) 小野 小町

28 ぬれて干す山路の菊の露のまにいつか千年を  
われは経にけむ(古今集) 素性法師

29 花散れる水のまにまにとめくれば山には春も  
なくなりけり(古今集) 清原深養父

30 逢坂の関の清水にかけみえていまやひくらむ  
望月の駒(拾遺集) 紀 貫之

31 音羽山今朝こえくればほととぎす梢はるかに  
今ぞ鳴くなる(古今集) 紀 友則

32 住の江の松を秋風吹くからに声うちそふる沖  
つしら波(古今集) 几河内躬性

33 み吉野の山の白雪ふみわけて入りにし人の音  
づれもせぬ(古今集) 壬生 忠岑

34 君が植ゑしひとむらすすき虫の音のしげき野  
べともなにけるかな(古今集) 御春 有輔

35 わが宿の梅の立枝や見えつらむ思ひのほかに  
君が来ませる(拾遺集) 平 兼盛

36 露にだにあてじと思ひし人しもぞ時雨ふる頃  
旅に行きける(拾遺集) 壬生 忠見

37 ほのぼのと有明の月の月影に紅葉ふさおろす  
山おろしの風(新古今集) 源 信明

38 浅茅生も雀がくれになりけりうべ木のもと  
は小暗かりけり(曾丹集) 曾禰 好忠

39 祖父父うまご輔親三代までに戴きまつるすべ  
らおほん神(後拾遺集) 大中臣輔親

40 つれづれと空ぞ見らるる思ふ人天降りこむも  
のならなくに(和泉式部集) 和泉 式部

41 老いにける吾身は何にかからまし松も千年の  
杖はつきたり(赤染衛門集) 赤染衛門

42 春草をこめて標めたる春の野にわれより外の  
すみれ摘ますな(相摸集) 相 摸

- 43 夕さればしほ風越してみちのくの野田の玉川  
千鳥なくなり(新古今集) 能因法師
- 44 旅寝するあしのまろやの寒ければつま木樵り  
つむ舟いそぐなり(新古今集) 源 経信
- 45 あなし吹く瀬戸の汐合に舟出してはやくぞず  
ぐる佐屋形の山(後拾遺集) 藤原 通俊
- 46 妻恋ふる鹿のと声に驚けば幽かにも身のなり  
にけるかな(散木奇歌集) 源 俊頼
- 47 秋はつる枯野の虫の声絶えばありやなしやを  
人のとへかし(千載集) 藤原 基俊
- 48 秋風にただよふ雲のたえまよりもれ出づる月  
のかげのさやけさ(新古今集) 藤原 頭輔
- 49 花さかば告げよと言ひし山守の来る音すなり  
馬に鞍おけ(源三位頼政集) 源 頼政
- 50 過ぎぬるか夜半のねざめの杜鵑こゑは枕にあ  
る心地して(千載集) 藤原 俊成
- 51 年たけて又越ゆべしとおもひきや命なりけり  
佐夜の中山(新古今集) 西行法師
- 52 さびしさはその色としもながりけり楨立つ山  
の秋の夕ぐれ(新古今集) 寂蓮法師
- 53 草も木もなびきし秋の霜きえてむなしき苔を  
はらふ山風(吾妻鑑) 鴨 長明
- 54 生きてよも明日まで人はつらからじこの夕暮  
をとば訪へかし(新古今集) 式子内親王
- 55 見わたせば山もとかすむ水無瀬川夕べは秋と  
何思ひけむ(新古今集) 後鳥羽院
- 56 大堰川松の尾山の麓ゆけば神さぶる身のかげ  
ぞ映れる(拾玉集) 慈鎮 和尚
- 57 吾が庵の嶺より出でて行く月の傾くかたは山  
の端もなし(壬生集) 藤原 家隆
- 58 春の夜の夢のうき橋とだえして峯にわかるる  
横雲の空(新古今集) 藤原 定家
- 59 人住まぬ不破の関屋の板びさし荒れにし後は  
ただ秋の風(新古今集) 藤原 良経
- 60 浅茅生や袖に朽ちにし秋の霜わすれぬ夢を吹  
くあらしかな(新古今集) 源 通光
- 61 風かよふねざめの袖の花の香にかをる枕の春  
の夜の夢(新古今集) 俊成 女
- 62 花さそふ比良の山風吹きにけりこぎゆく舟の  
あと見ゆるまで(新古今集) 宮内 卿
- 63 夕月夜潮みちくらし難波江の葦の若葉をこゆ  
るしら波(新古今集) 藤原 秀能
- 64 箱根路をわが越えくれば伊豆の海や沖の小島  
に浪の寄るみゆ(金槐集) 源 実朝
- 65 きりぎりす声はいづこぞ草もなきしら洲の夜  
の秋の夜の月(風雅集) 永福門院
- 66 大空にあまねくおほふ雲の心国土うるほふ雨  
くだすなり(風雅集) 京極 為兼
- 67 殿守の伴のみやつこよそにしてはらはぬ庭に  
花ぞちりしく(徒然草) 花園 院
- 68 ここにても雲居の桜さきにけりただかりそめ  
の宿と思ふに(新葉集) 後醍醐天皇
- 69 仕ふべき人や遣ると山ふかみ松の戸ざしもな  
ほぞ尋ねむ(新葉集) 後村上天皇
- 70 片絲の乱れたる世を手にかけて苦しきものは  
わが身なりけり(李花集) 北畠 親房
- 71 思ひきや手も触れざりし梓弓おきふし吾が身  
馴れむものとは(新葉集) 宗良親王
- 72 峰の松さわぐと見れば夕あらし麓の竹のこゑ  
になりゆく(草根集) 僧 正 徹
- 73 吾が庵は松ばらつづき海近く不二の高嶺を軒  
端にぞ見る(醒睡笑) 太田 道灌
- 74 つひに吾が着てもかへらぬ唐錦立田や何のふ  
るさとの山(晩花集) 下河辺長流
- 75 いかでわれ昔の人に似てしがな今の仏はたふ  
とくもなし(漫吟集) 僧 契 沖
- 76 熊にあらず虎にもあらず浅草に起伏す吾を誰  
か知るべき(戸田茂睡全集) 戸田 茂睡
- 77 降る雪の白斑の鷹を手に据ゑて武蔵野の原に  
出でにけるかな(賀茂翁家集) 賀茂 真淵
- 78 昼行きし川にしあれど夕されば静けくゆたに  
新しきごと(天降言) 田安 宗武
- 79 ちちのみの父いままさずて五十年に妻あり子あ  
りその妻子あり(揖取魚彦集) 揖取 魚彦
- 80 さしいづるこの日の本の光より高麗もろこし  
も春を知るらむ(自撰歌) 本居 宣長
- 81 すみだ川養着て下す後師に霞むあしたの雨を  
こそ知れ(うけらが花) 加藤 千蔭
- 82 香具山の尾上に立ちて見わたせば大和国原早  
苗とるなり(藤篋冊子) 上田 秋成
- 83 法の師のあなうらむすぶ床の上に紅葉かつ散  
る秋の夕ぐれ(泊泊舎集) 清水 浜臣
- 84 太秦の深き林をひびき来る風の音すこき秋の  
ゆふぐれ(六帖詠草) 小沢 芦庵
- 85 明石瀉松の木かげに道はあれど磯づたひして  
若布ひろはむ(桂園一枝) 香川 景樹
- 86 おそくとく皆わが宿に聞ゆなり所々の入相の

鐘(浦の汐貝拾遺)

熊谷 直好

87 ささ波の比良の高嶺の雲みればわがごと今日

を知らず顔なる(亮々遺稿)

木下 幸文

88 春秋のいでましどころ道かへてこはいづかた

の御幸なるらむ(千種家蔵本)

千種 有功

89 形見とて何か遺さむ春は花山ほととぎす秋は

もみち葉(良寛和尚歌集)

僧 良寛

90 東の大樹のもと神がたり四方の草木も言や

めて聴け(気吹舎歌集)

平田 篤胤

91 みづち棲む淵を千尋の底に見て太刀の緒かた

め行く山路かな(柿園詠草)

加納 諸平

92 蟻と蟻うなづきあひて何か事ありげに走る西

へ東へ(志濃夫廼舎歌集)

井出 曙覧

93 太刀佩きて吾がさもらへば夏の風暑く吹くな

り美作の宮(平賀元義集)

平賀 元義

94 吾が顔を壁の穴よりうかがひつ鼠の友と思ふ

なるべし(野雁集)

安藤 野雁

95 木津川に安治川に入る船の帆の行くかたわか

つ住吉の沖(草徑集)

大隈 言道

96 冬畑の大根の茎に霜冴えて朝戸出さむし岡崎

の里(海人の刈藻)

大田垣蓮月

97 月清みねざめてみれば播磨瀉むろのとまりに

船ははてにき(しのぶ草)

八田 知紀

98 身を捨てて千代を祈らぬ武夫もさすがに菊は

折りかざしつ(南山踏雲録)

伴林光平

99 弓は折れ太刀は碎けて身は疲れ息つきあへず

死なば死ぬべし(歎涕和歌集)

平野 国臣

100 ひとたびは野分の風の払はずは清くはならじ

秋の大空(姫島日記)

野村望東尼

○

〔解説〕「歴代秀吟百首」川田順撰並註釈。昭和十四年十一月三十日、東京三省堂刊。四六版一六六頁。題名のごとく、上代より近世に至る歌人百人を選びその秀吟各一首を撰んだ百人一首である。本文はその註釈。付載に、作者略譜がある。はじめに序文がある。

雑誌「短歌研究」昭和十三年十月号に、拙稿「歴代秀吟百首」を発表したのであったが、それには本文の歌と後記のみで、各首の評釈はしてなかった。百首の抄出には相当苦勞したので、其の儘にして置くのは惜しくなり、新に評釈を書きそへて、一卷にまとめ上梓することに決めた。小冊ではあるが、私の短歌観歴代の歌風及び主要作者に対する批判がこの中に含まれている。作歌体験から獲た少々ばかりの知識が圧縮されて、この中に潜んでいる。小倉百人一首を真似た遊戯では無いつもりである。昭和十四年十月、

川田順は川田剛の庶子として生れ、東大文科から法科に転じ、卒業後実業界に入り、営々ついに大成したが終始文学をすてず、歌集、西行研究、研究的エッセイなどを次々に上梓し、新万葉集の折には歌壇最高十一人の選者のうちに入り、名実共に歌壇の権威となり、人生得意の頃であった。明晰な頭脳と強靱な記憶力で、縦横に文筆を振った。そんな時成った秀吟百首評釈である。一首毎に気魄が見える。たとえば、法の師のあなうら結ぶ床の上に紅葉かつ散

八八

る秋の夕ぐれ(泊泊舎集)

清水 浜臣

何といふ秀技な歌だ。眉白き一僧の結跏趺座する禪堂内に、秋暮の風が落葉を吹き込む。落花深処説南朝といづれ。竹外は背景で得をしているだけの事だ。泊泊舎集など今日読まぬ人が多い。かやうな歌に逢着する事は、私如き特志家のみにも恵まれた愉快であらねばならぬ。第三句「ゆかのへ」などと軽薄な訓み方をしてはいけない。必ず床のうへにと、莊重な訓み方に従ふべきである。一首の姿は新古今体であるが、歌は極めて渋い。紅葉のくねなるさへも、渋さを助ける効果あるは芸術の魔法であらう。同じく浜臣に「法の師の曉起きの袖の上に月を残してゆく子規」といふのがあられるけれども、この僧は味噌齋である。

○泊泊舎集の中で、割合に知られてゐるのは「みそぎせしあと川柳一葉ちり二葉ながれて秋風ぞ吹く」「うま酒にわれ酔ひにけり頭をひ手まひ足まひわれまひにけり」などあるが共に凡俗の作。紀行の中に「影うつす不二のみ雪に埋もれて残る水なき河口の湖」ちよいと有名な歌だが、作意が目立つ。残る水なきなどは、凝つては思案に能はぬ類だ。

といった調子である。景樹の古調の歌をあげ、「乍併、これは万葉調桂園一枝ではこれが佳作など喜ぶならば、鰻屋に飛び込んで刺身を喰ふ底の、陳芥漢である」だの「芸術に楽遊した良寛の瓦礫の如き凡作中に、往々にして燦然たる金沙を撒く」など放言も愉快である。